太宰府市の文化財第110集

筑前国分尼寺跡 4

－筑前国分尼寺跡第15・16次調査－

平成22年
2010
太宰府市教育委員会

太宰府市の文化財第110集

筑前国分尼寺跡 4

－筑前国分尼寺跡第15・16次調査－

平成22年
2010
太宰府市教育委員会

序

本書は、太宰府市の北西部に位置する国分地区で行われた筑前国分尼寺跡の周辺遺跡に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書です。

遺跡周辺では筑前国分尼寺に推定される南門や講堂跡などが見つかっており、そこには弥生時代の住居跡などが重複して存在することなどが知られていました。

本書は平成３年度と４年度におこなった国庫補助事業による個人住宅建築に伴う緊急発掘調査を収録しており、旧石器時代から平安時代にわたる遺構と遺物を紹介しております。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心より願っております。

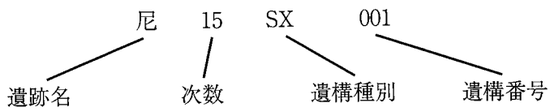
最後になりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました、地元区をはじめとする関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成22年３月

太宰府市教育委員会
教育長　關　敏治

例　言

1．本書は太宰府市国分２丁目で行われた筑前国分尼寺周辺遺跡の発掘調査報告書である。
2．遺構の実測には、国土調査法第Ⅱ座標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。
3．本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお遺構の性格を表記する記号については、SA柵列跡、SB掘立柱建物跡、SD溝、SF道路状遺構、SI住居跡、SK土坑、ST墳墓、SXその他の遺構などであり、略号として以下のように記載している。



4．遺構の実測は担当者が行った。
5．調査の空中写真撮影は（有）空中写真企画（代表壇睦夫）が行った。
6．遺物の実測は髙橋学、山村信榮の他、柳智子、森部順子、久家春美、木戸雅美、福井円が行った。
7．遺物の整理接合・復元作業は馬場由美、住山景子、末永亜由子が行った。金属製品の整理接合・復元作業・保存処理業務は株式会社タクトに委託した。
8．遺物の写真撮影は山村、柳が行った。
9．表入力・写真整理は柳、瀬戸口みな子、市川晴美、中原順子が行った。
10．図の浄書は調査担当者および遺物実測者が行った。
11．本書に用いた分類は以下のとおり。

須恵器・・・『宮ノ本遺跡Ⅱ　－窯跡篇－』（太宰府市の文化財第10集）太宰府市教育委員会　1992
陶磁器・・・『大宰府条坊跡XV　－陶磁器分類－』（太宰府市の文化財 第49集）
　　太宰府市教育委員会　2000
土器・・・・『大宰府条坊跡Ⅱ』（太宰府市の文化財第７集）太宰府市教育委員会　1983
弥生土器・・『太宰府・国分地区遺跡群１』（太宰府市の文化財第73集）太宰府市教育委員会　2004
　　『太宰府・国分地区遺跡群２』（太宰府市の文化財第94集）太宰府市教育委員会　2006
瓦・・・・・『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』　九州歴史資料館　2000
　　『宝満山遺跡４』（太宰府市の文化財第79集）太宰府市教育委員会　2005
瓦質・土師質土器・・・山村信榮「太宰府出土の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』1990

12．執筆は目次に示すとおりであり、編集は髙橋が担当した。

目　次

Ⅰ．遺跡の位置と歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（山村）　1

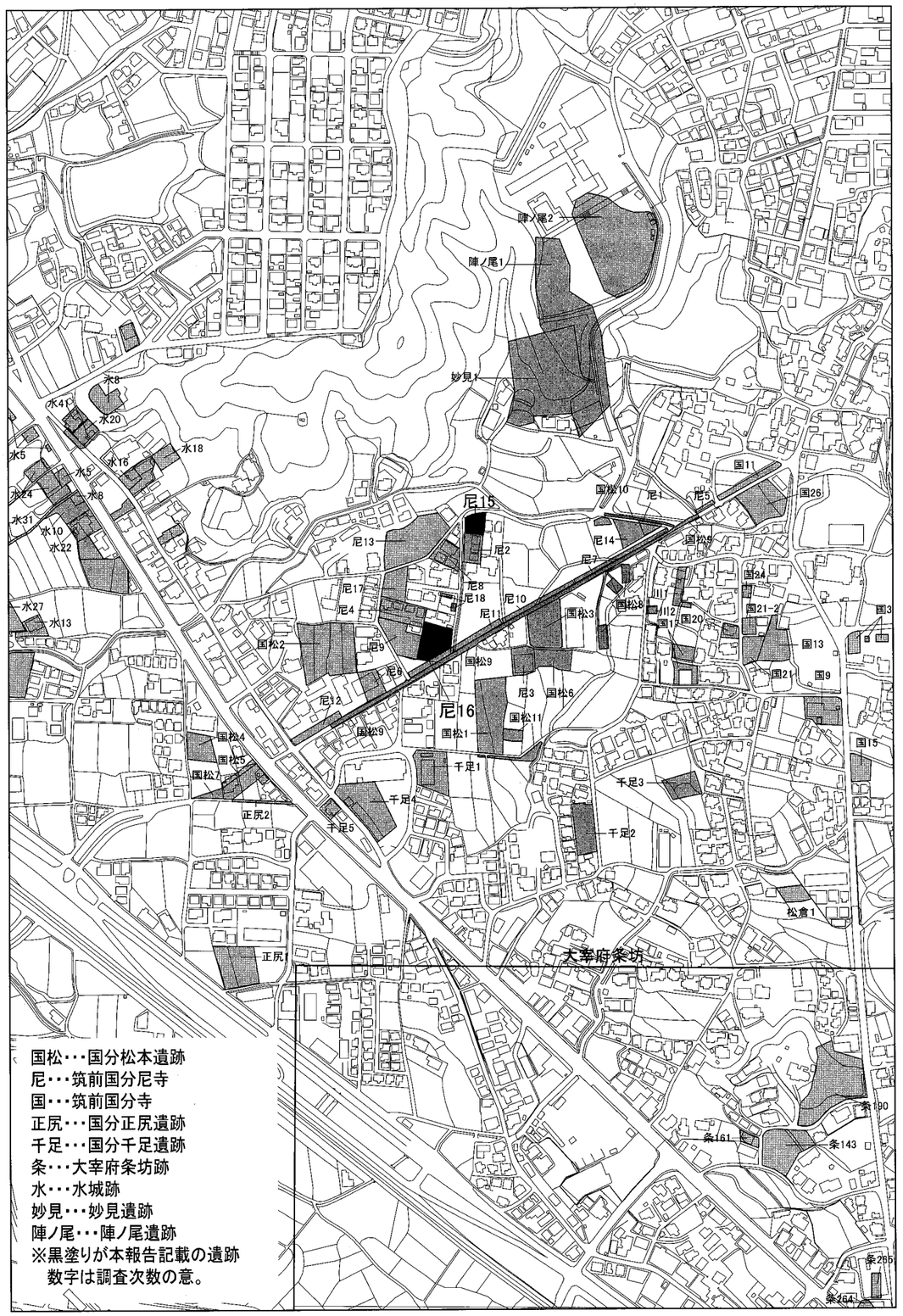
Ⅱ．調査体制 ・・・（山村）　2

Ⅲ．調査および整理方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（髙橋）　4

Ⅳ．調査報告
　1．筑前国分尼寺跡第 15 次調査
　　(1) 調査に至る経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（髙橋）　5
　　(2) 基本層位 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（髙橋）　5
　　(3) 遺構 ・・（髙橋）　7
　　(4) 遺物 ・・（髙橋）　11
　　(5) 小結 ・・（山村）　16

　2．筑前国分尼寺跡第 16 次調査
　　(1) 調査に至る経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（髙橋）　21
　　(2) 基本層位 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（髙橋）　21
　　(3) 遺構 ・・（髙橋）　21
　　(4) 遺物 ・・（山村）　28
　　(5) 小結 ・・（山村）　41

Ⅴ．まとめ ・・（髙橋）　42



国松・・・国分松本遺跡
尼・・・筑前国分尼寺
国・・・筑前国分寺
正尻・・・国分正尻遺跡
千足・・・国分千足遺跡
条・・・大宰府条坊跡
水・・・水城跡
妙見・・・妙見遺跡
陣ノ尾・・・陣ノ尾遺跡
※黒塗りが本報告記載の遺跡
数字は調査次数の意。

Fig.1　調査区周辺の遺跡分布図（1/5000）

Ⅰ．遺跡の位置と歴史的環境

国分地区は太宰府市の北東部にあり、東は大城山（四王寺山）に接し、北はそれから連なる丘陵が横たわり、その先端から664年に築かれた水城が北西へと延びている。西と南は御笠川に限られる。土地は山から川、東から西になだらかに下る地形であり、大規模な河川はなく、微地形の中で浸食と堆積を繰り返して小規模な扇状地のような地形を形成している。

この地域には後期旧石器段階の石器が散見され（尼寺10,16次）、国分寺跡周辺では鳥栖ローム層も一部で残存し、第四紀層が後の沖積作用で流出していなければ当該期の遺跡はまだ展開していたものと考えられる。

引き続く縄文時代の遺跡はこの地域においては未だ知られていない。弥生時代も初期の遺跡は存在せず、前期後葉から中期初頭になって千足町遺跡や尼寺16次など国分区の南西域でようやく土器が散見されるようになる。国分松本７次調査を中心とする甕棺墓群でもこの前期末から中期初頭の時期に形成が始まっており、集落相として後の時代につづく集団の定着化はこの頃に置かれよう。この甕棺墓群は国分区の西側の墳墓群であり、東側には小規模であるが陣ノ尾遺跡に別の甕棺墓が存在しており、漠然と地区の西と東で二つ以上の集団があったものとも思われる。弥生時代の集落の主体は、国分区の東側では濠状遺構や木道などが見つかった国分松本１次調査区周辺にその一つがあると見られるが、西側では国分千足町遺跡から国分尼寺跡周辺に中心的な居住域があるものと思われる。尼寺13次では保存のため未調査ながら、円形住居跡が５棟、方形住居跡1棟が検出されている。尼寺７次では銅矛の鋳型が出土しており、国分地域の当該期の集落は、鋳型の分布から見られる福岡市席田や大野城市域から連なる御笠川水系の弥生集落の連鎖の輪の中に位置づけられる。これらは弥生時代中期後半までに遺物消費のピークを迎え、後期には潮が引くように遺構の形成が停滞し、墳墓も居住域も明確にはできない。弥生の終末期から古墳時代初期になってようやく国分松本遺跡４次調査区などでまとまった遺物が見られるようになり、尼寺17次の箱式石棺墓群はこの時期のものと考えられ、集団墓の形成も復興している。衣掛天満宮西側の丘陵上（陣ノ尾４号墳地点）にも石棺墓があったとされ、集団が分派していたことも考えられる。古墳時代後期では国分千足町遺跡３次で方形の竪穴式住居跡が２棟検出され、初期須恵器が出土しているが、この他には顕著な遺跡は今のところなく、陣ノ尾古墳が九州須恵器編年Ⅳ式期に単独で形成されている。国分地区とは山裾続きの、大城山西裾や乙金山裾に見られるような後期の群集墳は形成されることなく、古代に移行している。古代の国分寺が成立するまでの国分地区は、水城という巨大遺跡が形成されながらも集落などの顕著な遺跡の展開はない。国分瓦窯跡は老司Ⅱ式の鐙瓦が出土し、大宰府Ⅱ期政庁形成段階で創業を始めていた可能性がある。740年代には国分僧寺、尼寺の建設が始まると共に尼寺14次などでは大型の掘立柱建物が形成され、古代官道の水城東門から南に入ったところで分岐路が設けられ、尼寺の前を抜けて、国分寺さらには国分瓦窯手前の辻遺跡まで約１kmの地域の基準線ともなる道路が建設された。この道の尼寺と僧寺の中間にある国分松本９次調査区である丘陵の段差の部分で、奈良後期から平安前期にかけての瓦窯の灰原が発見されており、両寺に対して瓦の供給をおこなっていたものと思われる。それに隣接する川添遺跡では平安前期の井戸を主体とする集落遺構が見つかり、両寺周辺での古代前半の遺跡動態が見えるようになってきた。

尼寺の伽藍としては現在発見されている４次から13次の間に展開している遺構は、平安前期以降には衰退しており９世紀末以降に移転した可能性が指摘されている。国分僧寺は10世紀中に外郭施設が無くなっており、塔も10世紀末に、講堂は11世紀末に無くなるなどして、中世を迎えている。国分寺周辺で

は辻遺跡を含めて鎌倉後期から室町前期にかけての小規模な遺構や遺物が散見され、中世大宰府の外縁部にあって小規模な集落の様相を呈していた。それも室町後期には途絶し、近世文書の示す国分村が出現する間の情報は現状では得られていない。

参考文献

『筑前国分尼寺跡・陣ノ尾遺跡』太宰府町教育委員会　1981
『大宰府市史考古資料編』太宰府市　1992
『筑前国分尼寺跡Ⅱ』太宰府市教育委員会　1991
『筑前国分尼寺跡Ⅲ』太宰府市教育委員会　1995
『辻遺跡』太宰府市教育委員会　1997
『太宰府・国分地区遺跡群１』太宰府市教育委員会　2004
『太宰府・国分地区遺跡群２』太宰府市教育委員会　2006

Ⅱ．調査体制

各年次の調査体制は以下の通りである。

（平成３／1991年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	中川シゲ子
	文化課長	佐藤恭宏
	埋蔵文化財係長	富田　譲
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治
		川谷　豊
調査	主任技師	山本信夫
		狭川真一
		城戸康利
		緒方俊輔（15次調査担当）
	技　　師	山村信榮　中島恒次郎　塩地潤一
	技師（嘱託）	田中克子（３年10月１日～）

（平成４／1992年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	中川シゲ子
	文化課長	佐藤恭宏
	埋蔵文化財係長	高田克二
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治
		川谷　豊
調査	主任技師	山本信夫

		狭川真一
		城戸康利
		緒方俊輔（16次調査担当）
		山村信榮（４年７月１日～）
	技　　師	山村信榮（～４年６月30日）　中島恒次郎　塩地潤一
	技師（嘱託）	田中克子

（平成20／2008年度）

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	松田幸夫
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	菊武良一
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	吉原慎一
		齋藤実貴男
調査	主任主査	城戸康利
		山村信榮（整理担当）
		中島恒次郎
	技術主査	井上信正
	主任技師	髙橋　学（整理担当）
		宮崎亮一
	技師（嘱託）	柳　智子　下高大輔　大塚正樹

（平成21／2009年度）

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	山田純裕
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	菊武良一
	調査係長	永尾彰朗（～６月30日）
		井上　均（７月１日～）
	主任主査	吉原慎一
		齋藤実貴男
調査	主任主査	城戸康利（都市整備課併任）
		山村信榮（整理担当）
		中島恒次郎
		井上信正
	技術主査	宮崎亮一
	主任技師	髙橋　学（整理担当）
	技師	遠藤　茜
	技師（嘱託）	柳　智子

Ⅲ．調査および整理方法

太宰府市教育委員会では、1979（昭和54）年から現在まで市の事業の一環として、埋蔵文化財包蔵地区内の埋蔵文化財発掘調査を行ってきた。調査方針や整理方法については、詳しくは参考文献に当たって欲しい。この調査方針ならびに、太宰府市発掘調査整理指針を元に太宰府市の調査・整理方法については熟成が為されてきた。その成果として今回の報告のように発掘調査（平成３・４年）からおおよそ、18年経過した調査についても最低限の報告は可能である。しかしながら、整理段階での疑問や不明箇所を解決しようと思っても、歳月の経過はそれを簡単には許してくれない。やはり、最善なのは調査担当者が調査後に時期を逃さず整理して、調査の成果と問題点を提出することに尽きる。今回、報告の尼寺推定地に関しても、現在は住宅地化がずいぶんと進んだ。調査成果の早急な整理・公開にとどまらずとそれを市民の財産として活用してもらえるシステムと、場の育成が今後の課題だと考えられる。

【参考文献】

『大宰府条坊跡』太宰府市の文化財第５集　太宰府市教育委員会　1982
『太宰府・佐野地区遺跡群Ⅰ』太宰府市の文化財第14集　太宰府市教育委員会　1989

Fig.2　筑前国分尼寺跡　第 15.16 次調査周辺図（1/5000）

Ⅳ．調査報告

1．筑前国分尼寺跡第15次調査

（1）調査に至る経緯（CD写真1、2、47～49）

調査地は、太宰府市国分２丁目458番地（旧大字国分字松本458番地）に所在する。
当該地に於いて住宅の建て替えの計画があり、遺跡包蔵地区に当たるため、文化財保護法第57条の申請があった。調査地周辺地域は筑前国分尼寺の伽藍推定地のため、国庫補助事業の重要遺跡確認として埋蔵文化財の発掘調査が行われた。開発対象面積は436㎡、調査面積は300㎡。調査期間は平成３年11月８日から同年11月26日。調査は緒方俊輔が行い、整理は髙橋学、山村信榮が担当した。

（2）基本層位（Fig.3）

層位についての調査担当者の記述・図面がないため正確なことは不明だが、画像から判断すると、表土を除去後0.5～0.7mで遺構面に到達している様子がうかがえる。現状の地面から0.2mほど表土層があり、その下層は0.3mほど明茶色の包含層となっている。遺構面は明黄茶色土がベース面となっており、その下層は淡灰色砂質土が確認されている。調査区の北部は暗茶灰色土が広く堆積している。この土層には弥生時代の中期～後期の土器、奈良時代の須恵器、土師器が多く含まれている。出土遺物の下限は黒色土器Ａ類の存在から、埋没年代は平安時代まで下ると考えられる。

Fig.3　筑前国分尼寺跡　第 15 次調査　遺構略測図（1/200）

Fig.4　筑前国分尼寺跡第 15 次調査　遺構配置図（1/150）

（3）遺構

掘立柱建物

15SB005（Fig.5、CD写真3～5）

調査区南東部に位置する掘立柱建物。桁行４ｍ（柱間1.9m＋2.1m）×梁行2.54mの２間×１間の東西棟。方位は桁行き方向でN-70°28′-Wである。建物の平面プランを検討して明らかに誤認が認められたため、調査時の平面復元を採用せず、一部図上復元している箇所がある。（柱穴a、柱穴b、柱穴e）その結果、掘方の平面形もまばらで、柱間も一定ではないが、掘方の底面のレベルはL=34.60m+-0.1mほどで揃っている。出土遺物から弥生時代中期以降に廃絶したと考えられる。

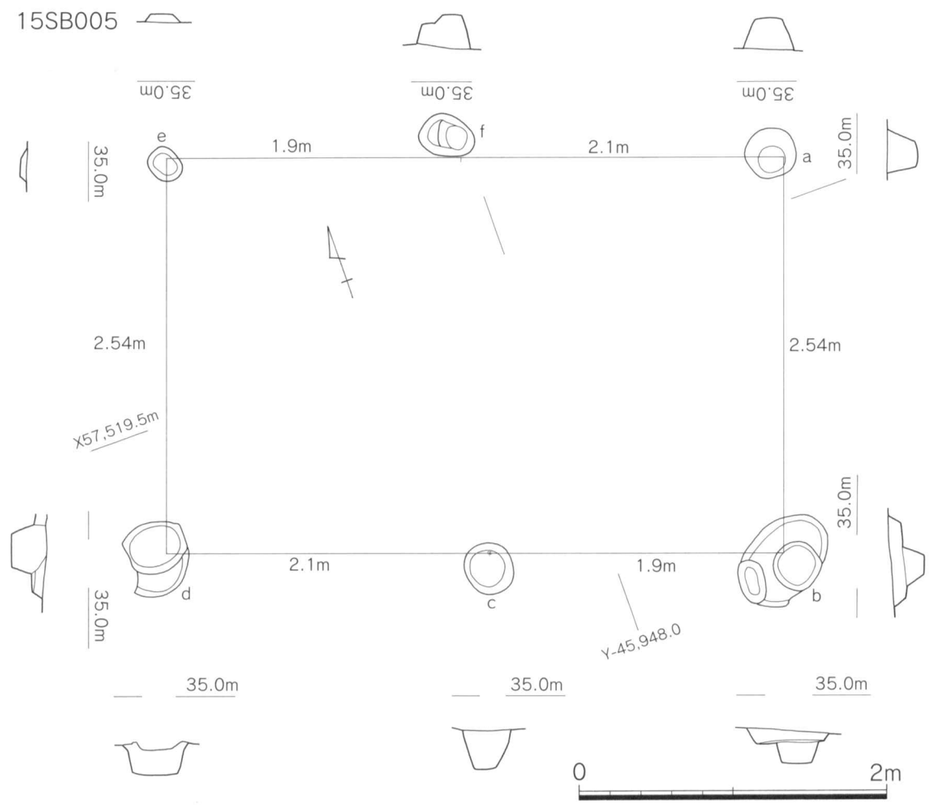


Fig.5　15SB005 実測図（1/40）

竪穴住居

15SI001（Fig.6、CD写真20～22）

調査区南東端に位置する竪穴住居。調査区内には北西隅が検出されているのみで、大部分は調査区外に展開する。調査区内では南北長2.7m×東西長0.9m、深さ0.19mを測る。埋土は、上層から暗褐色土が堆積しており、それを除去すると褐灰色土が検出される。この褐灰色土と同様のレベルで柱穴aが掘られている。調査担当者は調査時のメモで褐灰色土を貼り床とする可能性を指摘しているが、具体的な調査資料（土層図、写真等）に欠けているため、整理報告の時点では検証ができなかった。

柱穴aの土色は、上層から褐灰色土（黄色土がブロック状に混じっている）、暗灰色粘質土（柱痕）、淡茶灰色土（裏込め）となっている。出土遺物から、住居として使用されていたのは弥生時代中

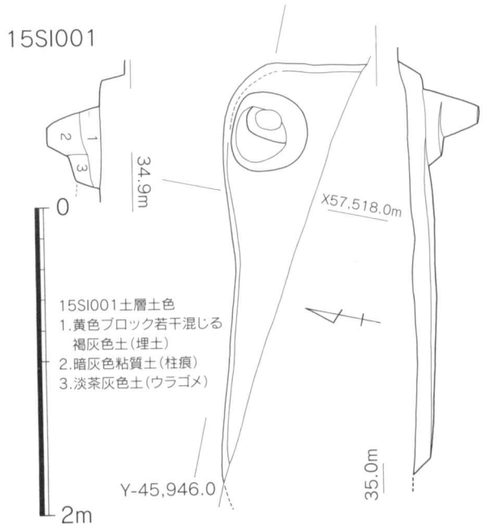


Fig.6　15SI001 実測図（1/40）

期以降で、弥生時代後期の段階で廃絶したと考えられる。

15SI010（Fig.7、8、Pla.1-2、CD写真6～19、23～43）

調査区東部に位置する竪穴式住居。南北長5.4m×東西長5.6mを測る。土層は、上層から黒褐色土、明褐色土、明褐色土（炭を多く含む）、黄褐灰色土（住居床直上土）、暗褐色土（ベッド状遺構覆土）、褐色土（ベッド状遺構構成土）、淡褐色土（壁溝上面埋土）、褐色粘質土（壁溝埋土）、黒褐色土（土坑e埋土）となる。検出段階では最終埋没土層の黒褐色土が遺構内全面に広がっており、その外側に暗褐色土が広がる。暗褐色土はおおむねベッド状遺構の範囲に展開している。黒褐色土を除去した段階で、住居内の北部壁側に比較的残存状態が良い土器が列状に並んだ状態で検出されている。（Fig.7、CD写真23・24、26～28参照）これは住居を廃棄する際の祭りの一種である可能性がある。暗褐色土を除去した段階で、住居内には北側に開口したコの字型に、ベッド状遺構が検出された。ベッド状遺構の幅は0.7～1.5m、厚さは0.05～0.14mを測る。ベッド状遺構の四隅には直径0.25～0.28m（南東隅の柱穴だけは東西長0.7m×南北長0.75mの楕円形を呈す）の円形柱穴が検出されたが、これが主たる柱穴である可能性は低いと考える。主柱穴はベッド状遺構を除去後にベッド状遺構の内側で検出した柱穴c、d、e、fと考えている。これらの柱穴は直径0.25～0.4m、検出面からの深さ0.15～0.32mを呈す。柱間は東西方向が2.58～2.6m、南北方向が2.80mである。ベッド状遺構がない北側には長方形の東西長1.37m、南北長1.0m、深さ0.25mの土坑がある。壁際には壁に沿う形で幅0.1m、深さ0.05m前後の溝が巡らされているが、南側では壁に直交する長さ0.8～0.9mの溝も二条認められる。これは元々ベッド状遺構の区切りを示していた可能性があるが、現状では判別できない。遺構の埋没時期は出土遺物から布留式段階初期と思われる。

15SI012（Fig.7、CD写真44）

調査区外に展開する竪穴式住居の一部。東西長2.75m、南北長0.7m、深さ0.13mを測る。埋土は茶褐色土。北東隅に柱穴aを検出した。柱穴aは東西長0.5m、南北長0.5m、深さ0.45mを測る。出土遺物から布留期古段階には埋没したと考えられる。

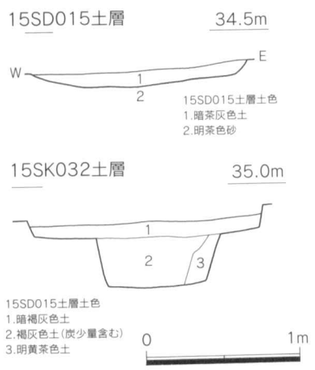


Fig.9　15SD015・15SK032 土層図（1/40）

溝

10SD015（Fig.9、CD写真45）

調査区南西部に位置する南北溝。長さ5.9m、幅1.6m、深さ0.16mを測る。埋土は暗茶灰色土。出土遺物がないため埋没時期は不明。

土坑

15SK032（Fig.9、CD写真46）

調査区南部東側に位置する楕円形土坑。段掘りになっており、外周は東西長1.3cm、南北長1.5m、深

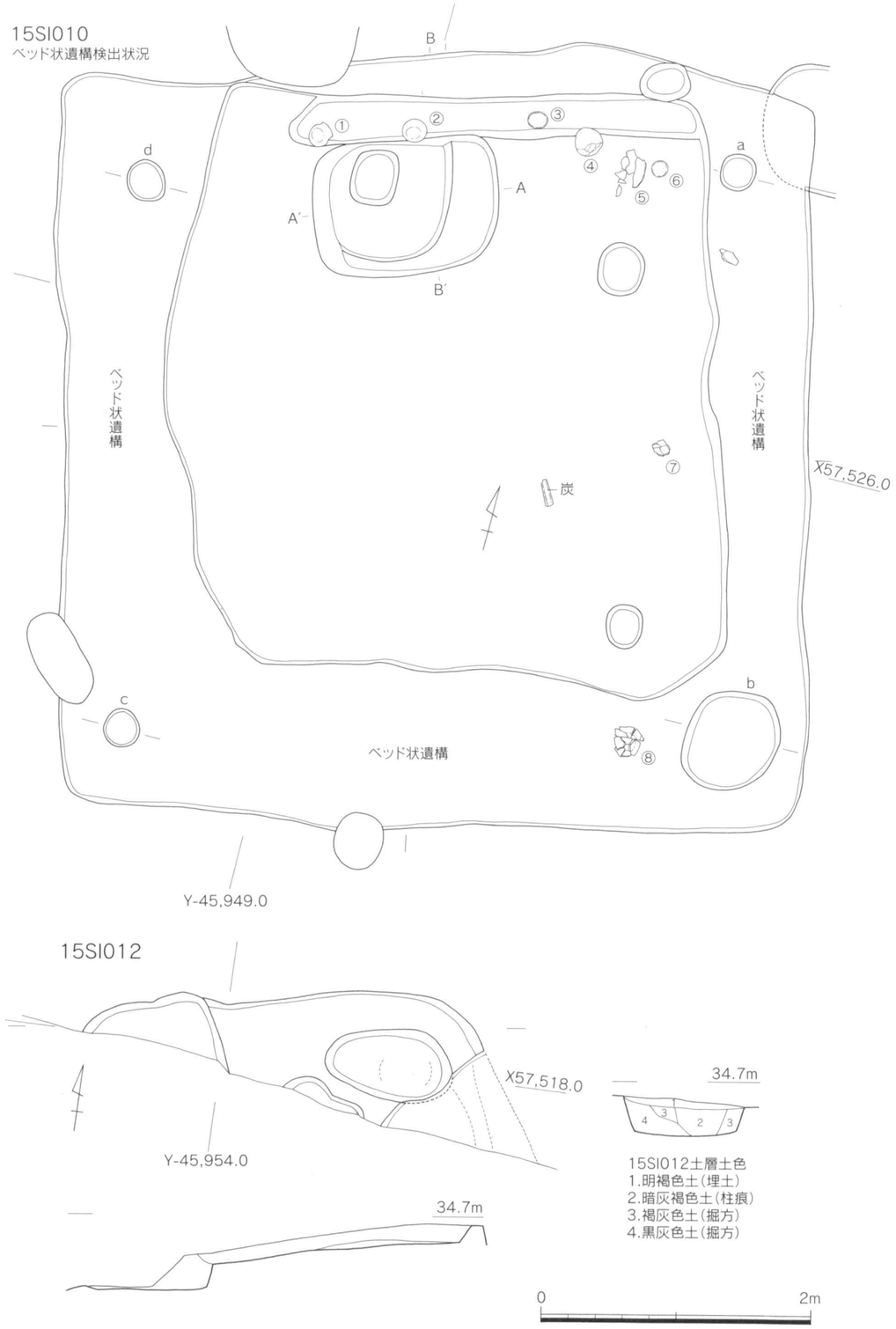


Fig.7　15SI010 ベッド状遺構検出状況実測図（1/40）、15SI012 実測図（1/40）

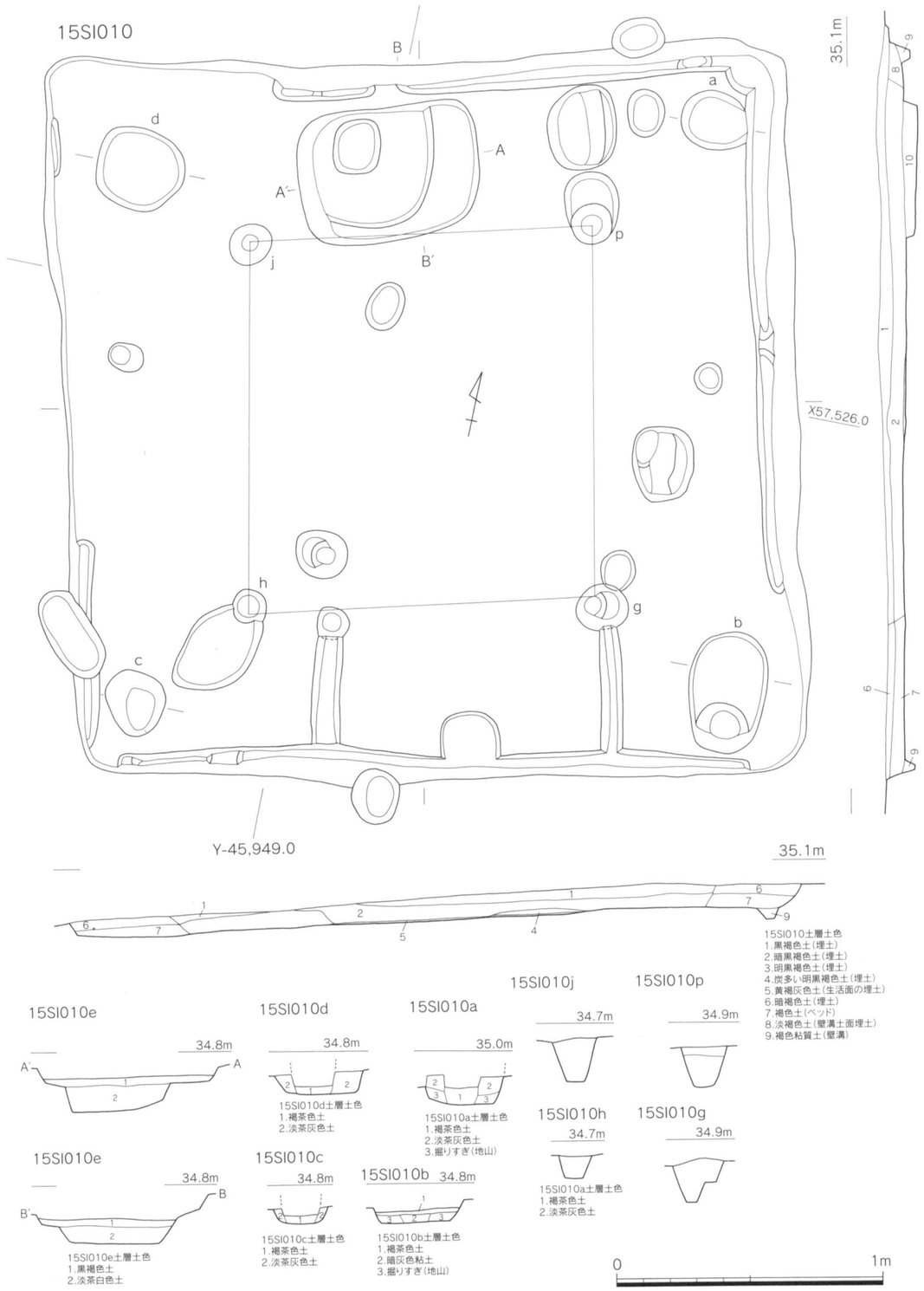


Fig.8　15SI010 実測図（1/40）

さ0.1mで、中央部に東西長0.8m、南北長0.8m、深さ0.34mの楕円形落ち込みがある。出土遺物から埋没時期は縄文時代晩期で、その後にうすく弥生時代の遺物を含んだ層が堆積したと考えられる。

その他の遺構

15SX002（Fig.3）

調査区南部東より位置する小穴。調査区外に展開する。出土遺物から埋没時期は弥生時代中期以降と考えられる。

15SX007（Fig.3）

調査区南部中央西よりに位置する小穴。泥岩製の石包丁が出土している。

15SX008（Fig.3）

調査区中央部南西部に位置する小穴。弥生土器の破片と黒曜石の石鏃が出土している。

15SX011（Fig.3）

調査区南部端から調査区外に広がるたまり状遺構。遺構の切り合い関係としては、15SI012を切っている。出土遺物として、土師器の椀ｃや甕ｂが出土していることから埋没時期は９世紀と考える。

土層

暗茶灰色土（Fig.4）

調査区北部に広がるたまり状の土層。埋土は暗茶灰色土。南側の掘方から北側に向かって傾斜堆積しており、深さは0.48cmを呈す。出土遺物としては、層位の所でも取り上げたが、弥生時代の中期～後期、奈良時代の遺物を多く含む。遺物の下限は黒色土器Ａ類のため、埋没時期は9～10世紀と考えられる。

（4）遺物

溝出土遺物

15SI001暗褐色土出土遺物（Fig.10、CD写真97・98）

弥生土器

甕×壺（1）　口縁部の小破片。外面に刷毛目調整が残る。

甕（2、3）　２は底部破片。内外面は摩滅によって調整不明。３は底部破片。外面は摩耗により調整不明。内面は指押さえ痕跡後に粗いナデ調整。

器台（4）　底部破片。器高5.4cm、復元底径12.6cm。内面体部は粗い横方向の刷毛目調整。底部端部近くは横方向の細かいヨコナデ調整。外面は全面刷毛目調整。焼成は良好。

15SI010黒褐色土出土遺物（Fig.10、CD写真97・98）

石製品

用途不明刃器（5）　縦8.6cm、横11.6cm、厚さ2.1cmを測る。重さ262g。石材は火成岩系の石材。色調は淡褐灰色。表面は剥離している。上部は欠損して、下部は削りを行っている。

石片（6）　縦1.3cm、横0.75cm、厚さ0.1cmを測る。黒曜石。

15SI010黒褐色土下層出土遺物（Fig.10、CD写真97・98）

弥生土器

高坏（7）　器高4.0cm。体部破片。内面の屈曲部の上部は、横方向の削り調整。下部は刷毛目調整後にナデ調整。外面は斜め方向への刷毛目調整。焼成はやや不良。色調はにぶい茶灰色。

15SI010e出土遺物（Fig.10、CD写真99）

古式土師器

壺（8）　口縁部から体部の破片。復元口径12.2cm、器高11.7cm。内面は縦方向のヘラ削りのあと

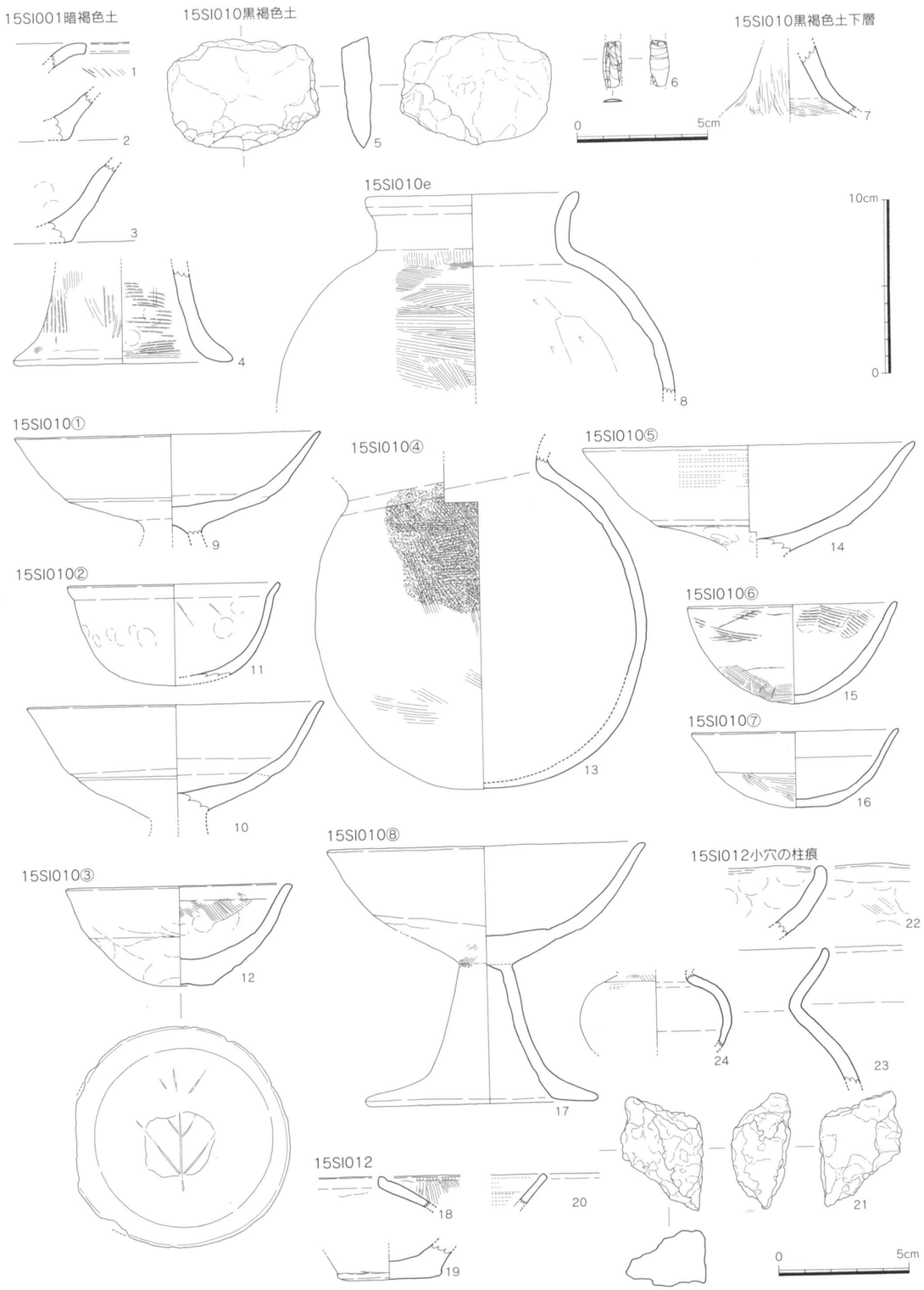


Fig.10　筑前国分尼寺跡第 15 次調査　住居跡出土遺物（1/2、1/3）

に、若干のナデ調整。口縁部はヨコナデ調整。外面は不定方向の刷毛目調整。焼成は良好。色調はにぶい橙色～茶灰色。胎土は3mm以下の白色・透明砂粒を多く含む。

15SI010①出土遺物（Fig.10、CD写真100）

古式土師器

高坏（9）　復元口径17.5cm、器高5.7cm。器壁は摩滅によって調整が不明。布留式新段階。

15SI010②出土遺物（Fig.10、CD写真101・102）

古式土師器

高坏（10）　底部を欠損する。復元口径17.0cm、器高6.5cm。内外面ともに摩耗により調整不明。体部屈曲部に粘土の貼り合わせ痕跡あり。色調は淡灰橙色～淡橙色～橙色。焼成はやや不良。

土師器

坏（11）　復元口径12.2cm、器高5.3cm。内面はミガキ状のナデ痕跡と、指頭圧痕が残る。口縁端部はヨコナデ調整。外面は不定方向のナデ調整と指頭圧痕が残る。焼成は良好。古墳時代前期。

15SI010③出土遺物（Fig.10、CD写真103・104）

弥生土器

鉢（12）　口径13.0cm、器高5.75cm、底径3.4cmを測る。口縁部が欠けるがほぼ完形品。内面は斜め方向の指押さえと刷毛目調整。口縁端部はヨコナデで丁寧に仕上げる。外面は指頭圧痕が多く残り、ナデ調整がなされている。底部には葉を押しつけて葉脈を象った押型文を施す。弥生時代後期末～。

15SI010④出土遺物（Fig.10、Pla.2-2、CD写真105）

古式土師器

壺（13）　口縁部を欠くが体部から底部にかけて丸みをおびるスタイルをもつ。内面は内部中位までヘラ削り。下半も方向はわからないがヘラ削りを施している。外面は不定方向の刷毛目痕を施す。色調、外面は橙色～茶灰色。部分的に黒色の煤が付着している。胎土は５mm以下の白色・透明砂粒を多く含み、やや粗い。焼成はやや良好。布留式新段階。

15SI010⑤出土遺物（Fig.10、CD写真106）

古式土師器

高坏（14）　筒部から体部を欠損している。口径19.0cm、器高6.2cm。内面は摩耗により調整が不明瞭。外面はミガキaを施す。体部中位から口縁部にかけて黒色変化している。色調はにぶい黄橙色。胎土は2.5mm以下の白色砂粒、茶色粒子を少量含む。焼成やや不良。

15SI010⑥出土遺物（Fig.10、CD写真107）

古式土師器

坏（15）　口径12.0cm、器高5.7cm。内面は指押さえ後にヨコナデ調整後に、刷毛目調整。外面体部はナデ調整で、底部近くはヘラ削り後にナデ調整、刷毛目調整。体部には粘土の接合痕跡が確認できる。色調は淡灰橙灰色～暗灰褐色。胎土はやや密。0.5～4mmの大小の砂粒を多く含む。西新町式。

15SI010⑦出土遺物（Fig.10、CD写真108）

古式土師器

坏（16）　復元口径11.8cm、器高4.3cm。内面調整不明。口縁部はヨコナデ調整。外面は刷毛目調整。色調は、淡褐茶色～淡茶褐色。焼成は良好。胎土は淡白褐色の0.5～1mm大の砂粒を多く含む。

15SI010⑧出土遺物（Fig.10、Pla.2-1、CD写真109）

古式土師器

高坏（17）　口径18.3cm、器高14.8cm、底径13.4cm。内面は摩耗しているが、ミガキ状のナデ調整

か。口縁部は調整のためのヨコナデ。外面は摩滅して調整が不明瞭。色調は淡灰橙色～暗橙色。胎土は、やや密。0.5～3.5mmの大小の砂粒を大く含む。焼成はやや不良。弥生時代終末。

15SI012出土遺物（Fig.10、CD写真110・111）

弥生土器

壺（18）　口縁部破片。外面は細かい刷毛目調整。内面は不明瞭だが削り調整か。焼成は良好。軟質。色調はにぶい橙色。口縁端部は上方へわずかに摘む。

鉢（19）　底部破片。内面はナデ調整。器高1.5cm、復元底径6.0cm。

高坏（20）　口縁部破片。内面にミガキa。外面は摩耗により不明瞭。焼成はやや不良。

金属製品

鉱滓（21）　縦4.4cm、横3.15cm、厚さ2.0cm。重さ31.6g。図の向かって右に平坦面があるが、これが器壁との剥離面と思われる。

15SI012小穴a出土遺物（Fig.10、CD写真110・111）

古式土師器

鉢（22）　口縁部破片。器高4.1cm。内外面に指頭圧痕が多く残り、ヨコナデ後に刷毛目調整した痕跡がみとめられる。色調は内外面ともに灰黒色。断面は茶灰色。胎土は1.5mm以下の砂粒を多く含む。焼成は良好でやや軟質。

甕（23）　口縁部破片。器高7.8cm。内外面調整不明瞭。焼成は不良。色調は灰黄橙色。

壺b（24）体部破片。内面は摩耗により調整不明。外面は摩耗により不明瞭だが、ミガキ調整を施している。焼成はやや不良。色調、内面は暗めの茶灰色。外面はにぶい橙色。

土坑出土遺物

15SK032出土遺物（Fig.11、CD写真110・111）

縄文土器

鉢（1）　底部破片。精製。器高2.5cm、復元底径7.4cm。内面は不定方向への刷毛目調整。外面はナデ調整で、底部外面は未調整。色調は暗茶灰色～茶灰色。胎土はやや粗で、0.1～7mmの白色砂粒子を多く含む。夜臼式。

その他の遺構出土遺物

15SX002出土遺物（Fig.11、CD写真112・113）

弥生土器

甕（2）　底部破片。器高4.2cm、復元7cm。内面はナデ調整。外面は刷毛目調整。底部外面はナデ調整。胎土は淡白褐色の0.5～1mm大の砂粒を多く含む。淡灰褐色の2mm大の砂粒をわずかに含む。底部は平底。焼成は良好。色調は外面は淡褐茶色。内面は茶褐色。底は黒褐色化。

15SX007出土遺物（Fig.11、CD写真112・113）

石製品

石包丁（3）　破片。縦2.2cm、横1.85cm、厚さ0.45cm。刃部の突端は欠けている。刃下部には使用時の摩擦痕跡が認められる。全体的に研磨加工している。中央やや上に直径4mm以上の穴を穿っている。石材は泥岩。

15SX008出土遺物（Fig.11、CD写真112・113）

石製品

石鏃（4）　縦1.3cm、横0.85cm、厚さ0.4cm、重さ0.4g。先端と基底部を欠損。石材は黒曜石。

15SX011出土遺物（Fig.11、CD写真112・113）

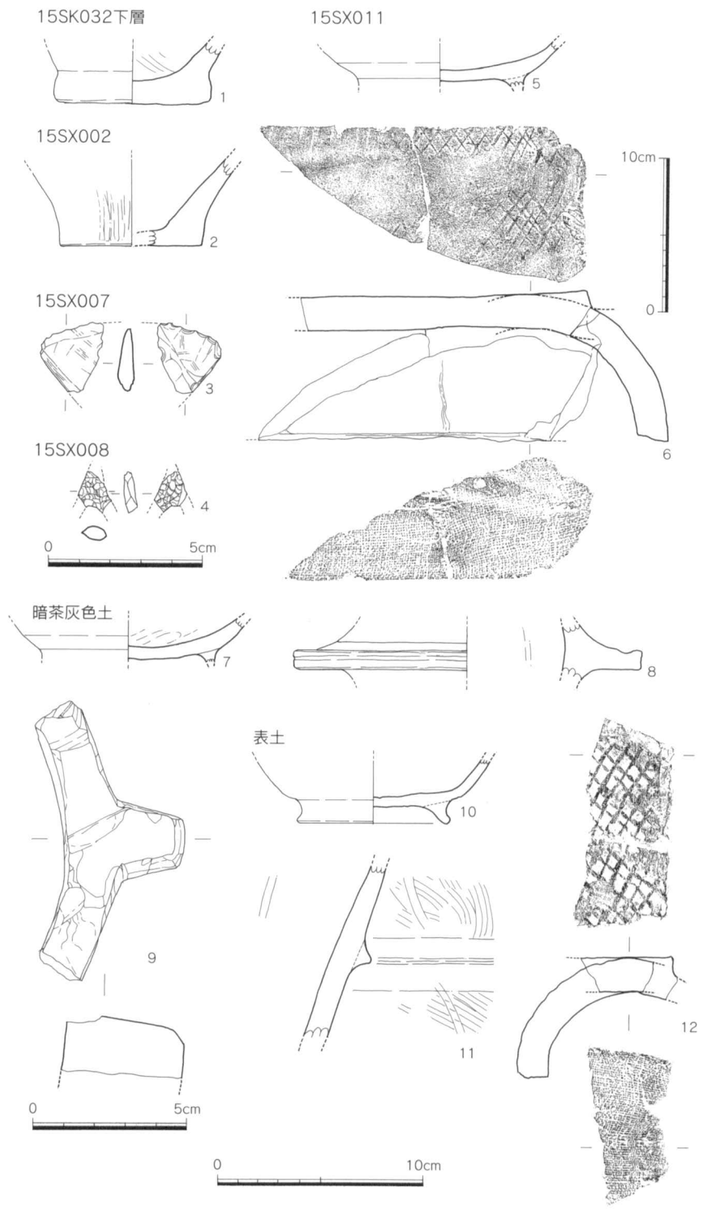


Fig.11　筑前国分尼寺跡第 15 次調査　土坑、その他の遺構出土遺物（1/2、1/3、1/4）

土師器

坏c（5）　高台部の破片だが、高台の畳付部は欠損する。器高2.1cm。色調は淡橙色。胎土は1mm以下の白色砂粒子を含む。2mm以下の茶色粒子をやや多く含む。焼成はやや良好。高台は貼り付け高台。外底面の底部切り離しは回転ヘラ切り後にナデ調整。

瓦

丸瓦（6）　縦22.3cm、幅9.6cm、厚さ2.2cmを測る。玉縁部が欠損している。内面は布目痕と布つぎ目があり、外面はI-Cb類の格子目叩きを施す。測端面の切り離し技法は、切りこみを入れて分割後に未調整。焼成は良好。胎土は4mm以下の白色砂粒子を多く含む。

暗茶灰色土出土遺物（Fig.11、CD写真114・115）

黒色土器

椀c（7）　底部破片。器高2.0cm。内面にナデ調整で指頭圧痕が残る。色調、内面は黒灰色。高台は貼り付け。A類。

弥生土器

筒型器台（8）　突帯部破片。最大径17cm。外面は研磨して茶褐色の丹を塗る。内面はヨコナデ調整、刷毛目調整。

石製品

滑石製石鍋（9）　縦9cm、横4.9cm、厚み1.8cmを測る。鍔部の破片を再利用する二次加工品。

表土出土遺物（Fig.11、CD写真114・115）

土師器

椀c（10）　高台部の破片。器高3.0cm、底径7.4cm。高台は外に張る形。色調は淡褐茶色。

弥生土器

甕（11）　体部破片。突帯をナデ調整で貼り付けている。外面は刷毛目調整。内面は横方向のナデ調整後に刷毛目調整。色調は淡褐色～明茶褐色。

瓦

丸瓦（12）　玉縁部の破片。内面は布目痕。外面はI-Cb類の格子目叩きを施す。焼成は良好で、瓦質で硬質に焼き上がっている。色調はにぶい灰褐色～黒灰色。

（5）小結

本調査区は筑前国分尼寺推定地の北東隣地にあたり、調査前から尼寺関連の遺構の存在が期待された。過去の発掘調査の成果により、筑前国分尼寺は８世紀後半頃に成立し、９世紀中頃あるいは後半には廃絶していた可能性が指摘されている。最も近い13次調査区では大型の講堂に比される掘立柱建物とその東側に経蔵のような総柱式の建物が検出されている。しかし、本調査区においては当該奈良時代の遺構は顕著には存在しなかった。

遺構の主体は弥生時代中期以降の掘立柱建物15SB005と古墳時代前期初頭頃の方形竪穴式住居15SI010,012である。15SI001は北西隅の一部が検出されただけで弥生時代中期後半以降の所産とまでしかいえない。しかし、その位置や方向から前記15SI010,012と関連のある一連のものとも考えられる。前期でも土器の様相から布留式期の新相段階にあたる。この時期の住居域は周辺では認知されていなかったもので、新たな所見として重要である。掘立柱建物は弥生時代中期以降の埋没時期であるが、古墳時代前期の住居跡群とは直接的な切り合い関係がなく、先後関係が明確でないが、方位は住居群とは異なっており、時期も異なる可能性がある。

今回の調査によって、国分における平野部の古墳時代初期集落の主体が本調査区周辺にあることがわかった。弥生時代中期にはこのエリアより西側に甕棺を持つ墳墓群が、東側には環濠と思わしき大溝を伴う集落があり、本調査地はその間に挟まれた位置にあたる。後期の集落の動向が不明であるが、御笠川上流域での集落動態の解明にとって一つの足がかりとなった。

Tab.1　筑前国分尼寺跡第 15 次調査　遺構番号台帳

※「遺構面」で未記入のものは、1面目および遺構面不明のものを含む。

S-番号	遺構番号	種　別	備　　考	取り上げ時の埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
1	15SI001	竪穴住居跡		褐灰色土（貼り床）→暗褐色土	33→31→1		弥生中期～弥生後期	AB2
2	15SX002	小穴					弥生中期	A3
3		小穴群					弥生中期	A2
4		小穴群			31→4　14→4		弥生中期	B2
5	15SB005	掘立柱建物					弥生中期	A2～C4
6		小穴群					弥生	A3
7	15SX007	小穴凹	石包丁片					B5
8	15SX008	小穴凹						C5
9		小穴 凹群			9→5b		弥生	A2
10	15SI010	竪穴住居跡		淡褐色土→ベッド・褐色土→暗褐色土（ベッド風覆土→黒褐色土下層→黒褐色土	10→29・22・23		布留(新)	D2～E3
11	15SX011	大凹			12→11		9c～	A5
12	15SI012	竪穴住居跡	12bは壁溝の可能性あり黒灰土の凹浅い		13→12→11		布留（古段階）～	A4
13		土坑			13→12・6		弥生後期～	A4
14		土坑			14→4		弥生中期	C2
15	15SD015	溝	南北方向		15→11			BC6
16		小穴					古墳～	B4
17		小穴群					弥生後期～	B4
18		小穴群					弥生～	C4
19		凹群						C5
20		欠番						C3
21		小穴群		暗茶灰色土	10→21		古墳～	E2
22		小穴群			10→22			C4
23		小穴群	10→23		10→23			C3～D4
24		凹			暗茶灰色→24		奈良～	D4
25		欠番						
26		凹					弥生～	B2
27		小穴群					奈良～	D6
28		凹群			28→暗茶灰色土		弥生中期～	D5
29		凹	10→29		10→29			E3
30		欠番						
31		土坑			33→31		弥生～	B2
32	15SK032	土坑			32→5c		縄文晩期～弥生	A3
33		小穴	31の下層小穴		33→31		弥生	B2
34		小穴					弥生中期～	B2
35		欠番						
36		小穴					弥生中期～	E6

Tab.2　筑前国分尼寺跡第 15 次調査　出土遺物一覧表　その 1

S-1暗褐色土

弥生土器	後期:器台 甕×壺口 壺底1×2

S-1褐灰色土

弥生土器	中期:甕?

S-1小穴a

弥生土器	中期:破片
	後期:小壺×鉢

S-1小穴a裏込め

弥生土器	中期:壺

S-2

弥生土器	中期:甕底3a
石製品	ob-f(1)

S-3

弥生土器	後期:甕?

S-5a

弥生土器	中期:破片

S-5b

弥生土器	甕?

S-5c

弥生土器	中期:壺

S-5d

弥生土器	中期:甕?

S-5e

弥生土器	中期:甕

S-6

弥生土器	後期:甕　小壺?

S-7

石製品	石包丁(1.泥岩)

S-8

弥生土器	破片
石製品	ob-AP(1)

S-10

古式土師器	坏　高坏4　甕　鉢
石製品	ob-f(1)

S-10褐色土

弥生土器	中期:甕口5
石製品	ob-f(姫島産、1)

S-10褐色土(ベット)

古式土師器	甕
弥生土器	中期:高坏　甕口5　甕底3a
	後期:　支脚

S-10黒褐色土

弥生土器	中期:甕口4　甕口5　甕底3a　壺底1
	後期:坏
石製品	ob-f(1)　ob-マイクロフレーク(1)　用途不明刃器(1)

S-10黒褐色土下層

須恵器	破片
古式土師器	高坏脚3　甕
弥生土器	中期:甕口4　甕口5　甕底3b　壺1a
石製品	and-f(2)

S-10小穴a

古式土師器	甕　鉢?
弥生土器	破片

S-10小穴の柱痕

弥生土器	破片

S-10小穴a裏込め

弥生土器	後期:甕?

S-10小穴b

古式土師器	甕?
弥生土器	中期:高坏　甕底3a　壺1a

S-10小穴b裏込め

弥生土器	中期:甕底3

S-10c

弥生土器	破片

S-10d

弥生土器	中期:甕棺蓋

S-10e

古式土師器	高坏坏4　高坏脚2　甕(布留新相～)
弥生土器	中期:甕口5

S-10小穴f

弥生土器	破片

S-10小穴h

弥生土器	破片

S-10小穴i

弥生土器	破片

S-10小穴j

弥生土器	破片

S-10小穴k

弥生土器	中期:甕

S-10小穴o

古式土師器	甕

S-10 l

弥生土器	中期:甕底3b

S-10小穴n

弥生土器	中期:破片

S-10北側壁溝

古式土師器	甕
弥生土器	中期:高坏b　壺1a

S-10①～⑧

古式土師器	高杯　壺　杯
土師器	杯
弥生土器	高杯　鉢2

S-11

土師器	椀c　杯c　甕b
弥生土器	中期:壺
瓦類	平瓦(須恵質、斜格子)　平瓦(土師質、縄目)
	丸瓦(瓦質、無文)

S-12

須恵器	蓋?
古式土師器	甕
弥生土器	中期:高坏　甕口5　広口壺
	後期:高坏3　壺底1　壺底5
金属製品	鉱滓(1、金属質)

Tab.3　筑前国分尼寺跡第 15 次調査　出土遺物一覧表　その 2

S-12小穴a

弥生土器	中期:甕口5
古式土師器	高坏　甕5　壺6?
土製品	焼土塊(1)

S-12小穴の埋土

古式土師器	甕

S-12b

弥生土器	中期:破片

S-13

弥生土器	中期:甕底3
	後期:大甕

S-16

須恵器	小甕
弥生土器	破片

S-17

弥生土器	中期:甕?
	後期:甕?

S-18

弥生土器	破片

S-21

古式土師器	甕?
弥生土器	中期:甕

S-27

弥生土器	破片
瓦類	平瓦?(瓦質、不明)

S-28

弥生土器	中期:甕口5　壺底1

S-29

古式土師器	甕
弥生土器	中期:甕?

S-31

弥生土器	中期:壺1a

S-32上層

弥生土器	破片

S-32下層

縄文土器	粗製深鉢　精製鉢
石製品	and-f(1)　ob-f(1)

S-34

弥生土器	中期:破片

S-36

弥生土器	中期:甕

黒褐色土

石製品	and-f(1)

暗茶灰色土

須恵器	坏a2　壺
黒色土器A	椀c
弥生土器	中期:筒形器台　甕口5　甕底1
	後期:器台2　小壺
瓦類	平瓦(土師質、縄目)　平瓦(瓦質、縄目)
金属製品	鉱滓(鉱物質、1)
石製品	ob-f(1)　石鍋A(1)

表土

須恵器	甕
土師器	椀c
弥生土器	中期:甕
瓦類	平瓦(須恵質、縄目)　平瓦(須恵質、無文)
	平瓦(土師質、無文)　平瓦(瓦質、縄目)
	丸瓦(須恵質、斜格子)　丸瓦(瓦質、無文)
石製品	ob-f(1)

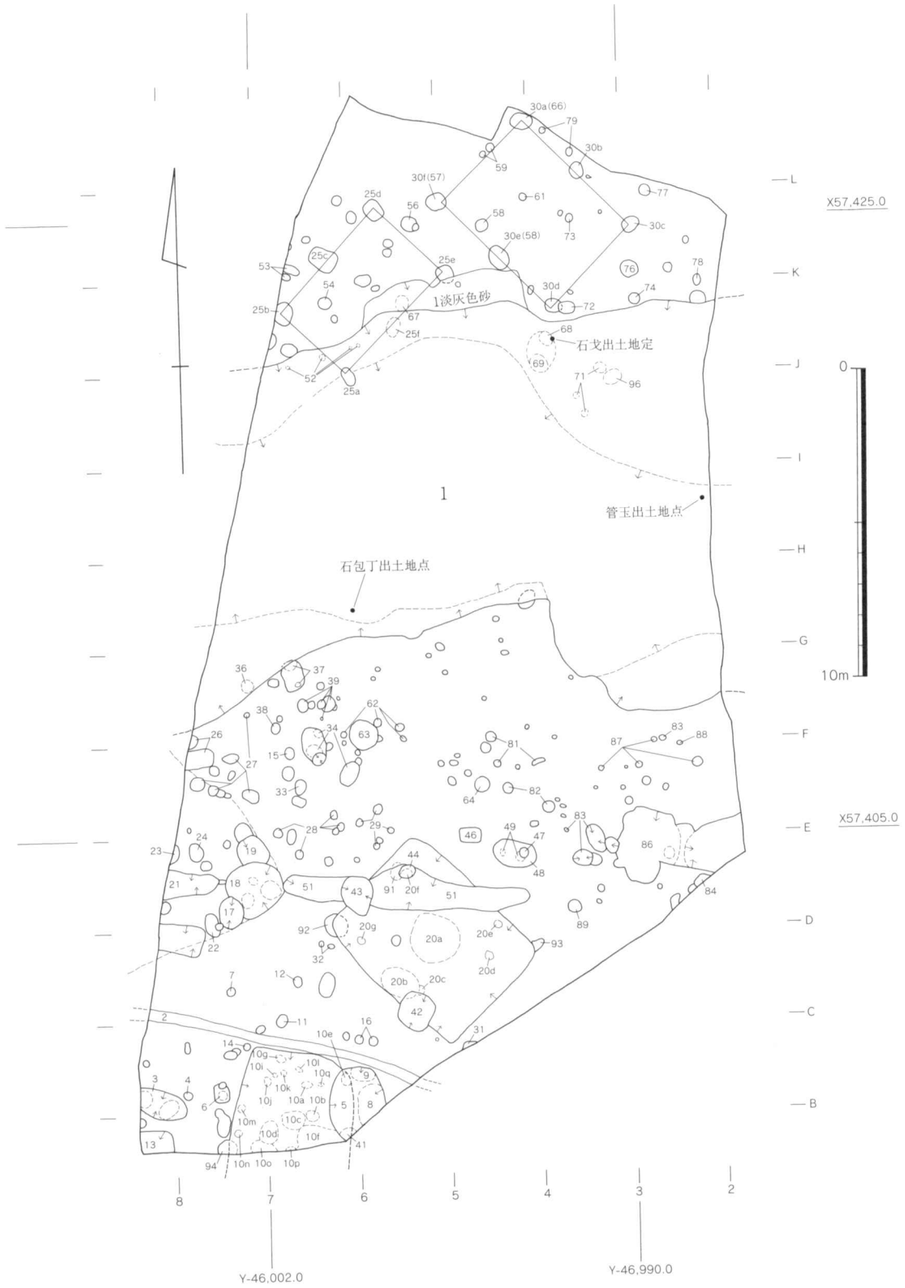


Fig.12　筑前国分尼寺跡第 16 次調査　遺構略測図（1/200）

2．筑前国分尼寺跡第16次調査

（1）調査に至る経緯（CD写真50・51）

調査地は、太宰府市国分２丁目450-1（旧大字国分字松本450-1番地）に所在する。

当該地に於いて住宅の建て替えの計画があり、遺跡包蔵地区に当たるため、文化財保護法第57条の申請があった。調査地周辺地域は、筑前国分尼寺の推定地のため、国庫補助事業の重要遺跡確認として埋蔵文化財の発掘調査が行われた。開発対象面積は860㎡、調査面積は520㎡。調査期間は平成４年９月21日から同年10月28日。調査は緒方俊輔、整理は髙橋学、山村信榮が担当した。

（2）基本層位

当該調査においては、調査時に資料に層位について言及した記述がないため、整理時段階ではあるが復元的に考えてみる。幸いにも16SX001の土層図を確認すると、表土から0.7mで遺構面が検出されている。表土から0.3mほどは４層ほどに分けられる表土が堆積しており、そこから遺構面までは茶褐色土とされる遺物包含層が堆積していることがわかる。

（3）遺構

掘立柱建物

16SB025（Fig.14、CD写真52～58、66、94・95）

調査区北部に位置する掘立柱建物。桁行4.4m（柱間2.19m＋2.21m）×梁行3.4mの２間×１間の南北棟。方位は桁行き方向でN-41°23′-Eである。遺構の切り合い関係では、16SX001に切られている。16SX001に浸食されている柱穴a、fではよくわからなかったが、その他の柱穴では、柱痕は４カ所で確認されている。柱材は0.15～0.22m程度の太さであったと推定される。出土遺物から弥生時代中期以降に廃絶したと考えられる。出土遺物から埋没時期は弥生時代後期中頃と考えられる。なお、柱筋の延長部に２ヵ所トレンチを設定して掘り下げたが、柱穴の続きは確認されなかった。

16SB030（Fig.15、CD写真59～66）

調査区北部に位置する掘立柱建物。桁行5.3m（柱間2.7m＋2.6m）×梁行3.8mの２間×１間の南北棟。方位は桁行き方向でN-45°41′-Wである。柱痕は平面観察の段階では、柱穴d、柱穴eで確認されたが土層では検証されていない。出土遺物から弥生時代中期後半以降に埋没したことが考えられる。

竪穴式住居

16SI010（Fig.16、CD写真67、68～78）

調査区南端に位置する竪穴式住居跡。調査区外に遺構が展開している。かなり削平をうけており、遺構の立ち上がりは壁際で0.05m程度である。住居内中央には南北長0.73m、東西長0.8m、深さ0.12mを測る不整円形土坑が存在し、埋土は黒褐色土の単一層であった。この土坑の北側に、南北長0.4m、東西長0.45m、深さ0.28mを測る二段掘りの柱穴aがあり、これが主たる柱穴の１つになると考えられる。中央土坑を挟んで反対側の南側にも、この柱穴に対になる柱穴の存在が推定でき、おそらく柱二本建ちの構造と考えられる。出土遺物から埋没時期は弥生時代中期中葉である。

16SI020（Fig.17、CD写真67、79～89）

調査区南部中央に位置する竪穴式住居跡。平面プランは長方形を呈す。東西長5.8m、南北長4.55m、深さ0.12mを測る。かなり削平を受けており、検出段階ではほぼ床面しか残っていなかった。住居中央に

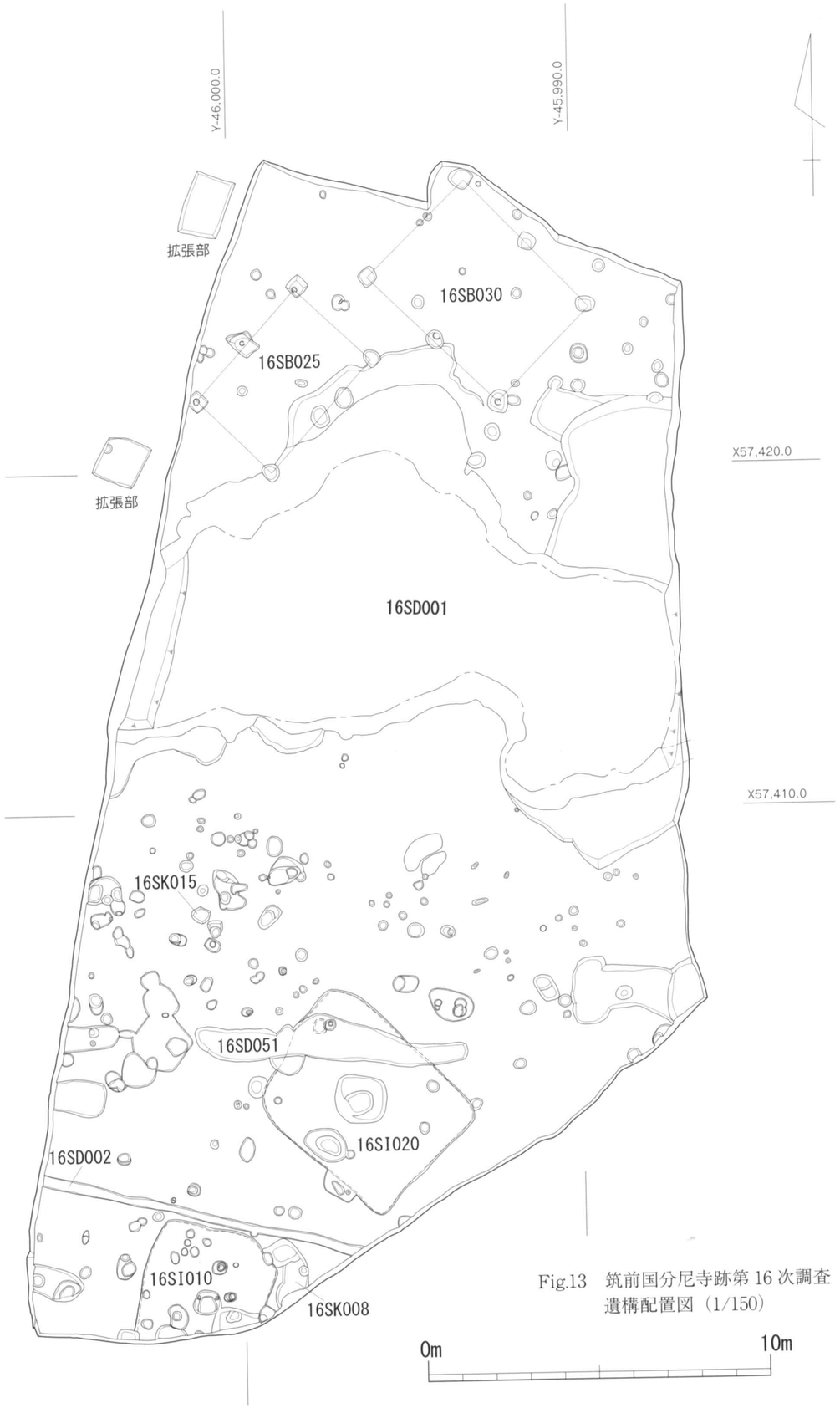


Fig.13　筑前国分尼寺跡第 16 次調査遺構配置図（1/150）

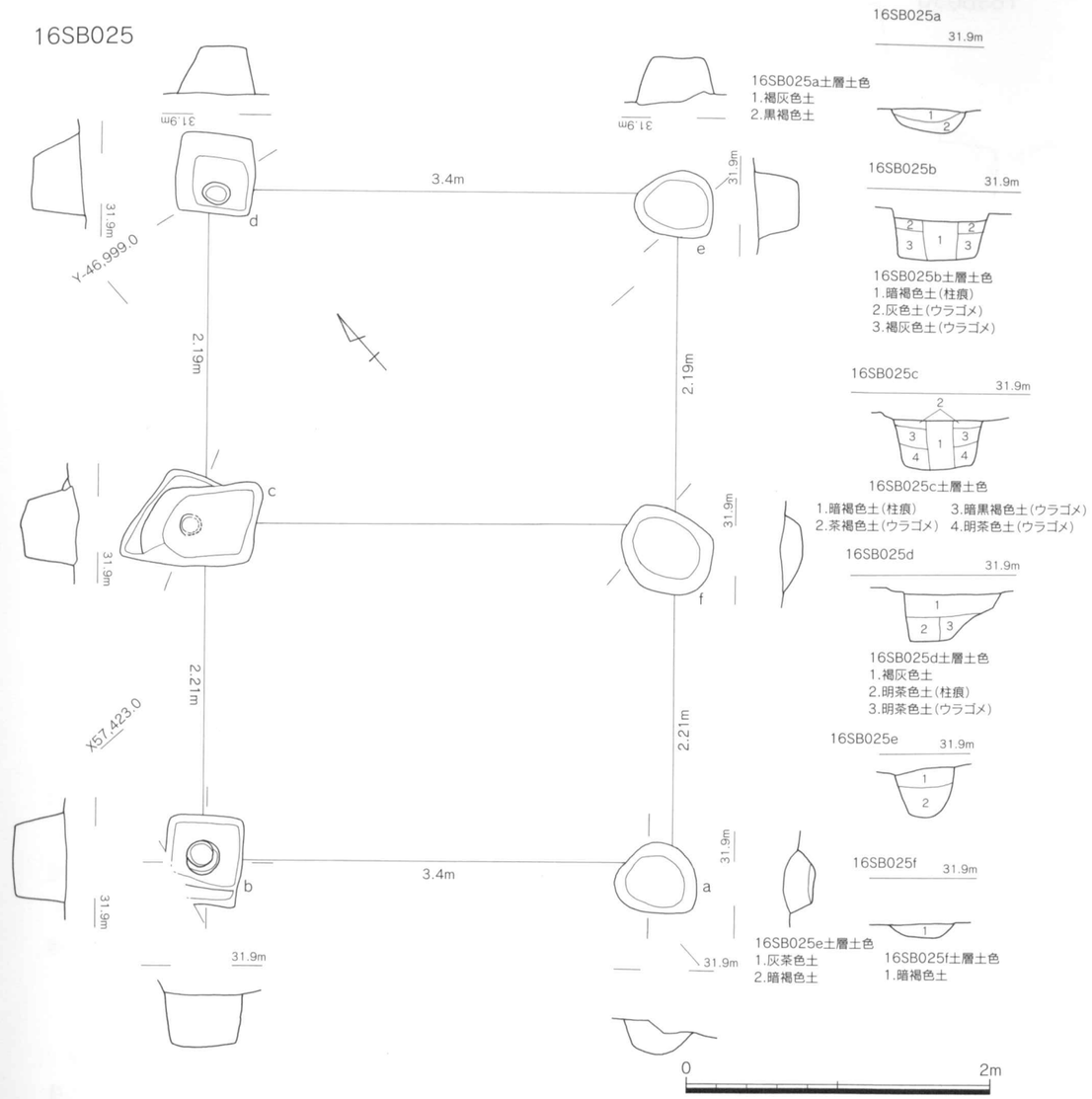


Fig.14　16SB025 実測図（1/40）

東西長1.7m、南北長1.6m、深さ0.13mを測る、平面プランが不整円形の段掘り土坑がある。中央炉と考えられる。南側のにも東西長1.3m、南北長0.95m、深さ0.3mを測る、平面プランが楕円形で段掘りの土坑がある。これは住居入り口の土坑の可能性がある。柱穴は５つほど確認できたが、並びが不整で上部構造はよくわからない。埋土は床面に貼り床状態で検出された茶灰色層の上に、埋土としては堆積が古いところから、暗褐色土、暗茶色土となる。出土遺物から埋没年代は弥生時代中期後半と考えられる。

溝

16SD001（Fig.13・18、CD写真90・91）

調査区中央に位置する大溝状遺構。検出長18m、幅9.5m～13m、深さ1.5mを測る。東西方向に延びており、調査区外に展開する。大きく上層、下層の二層に大別できる。下層の赤茶色粗砂、礫層は遺

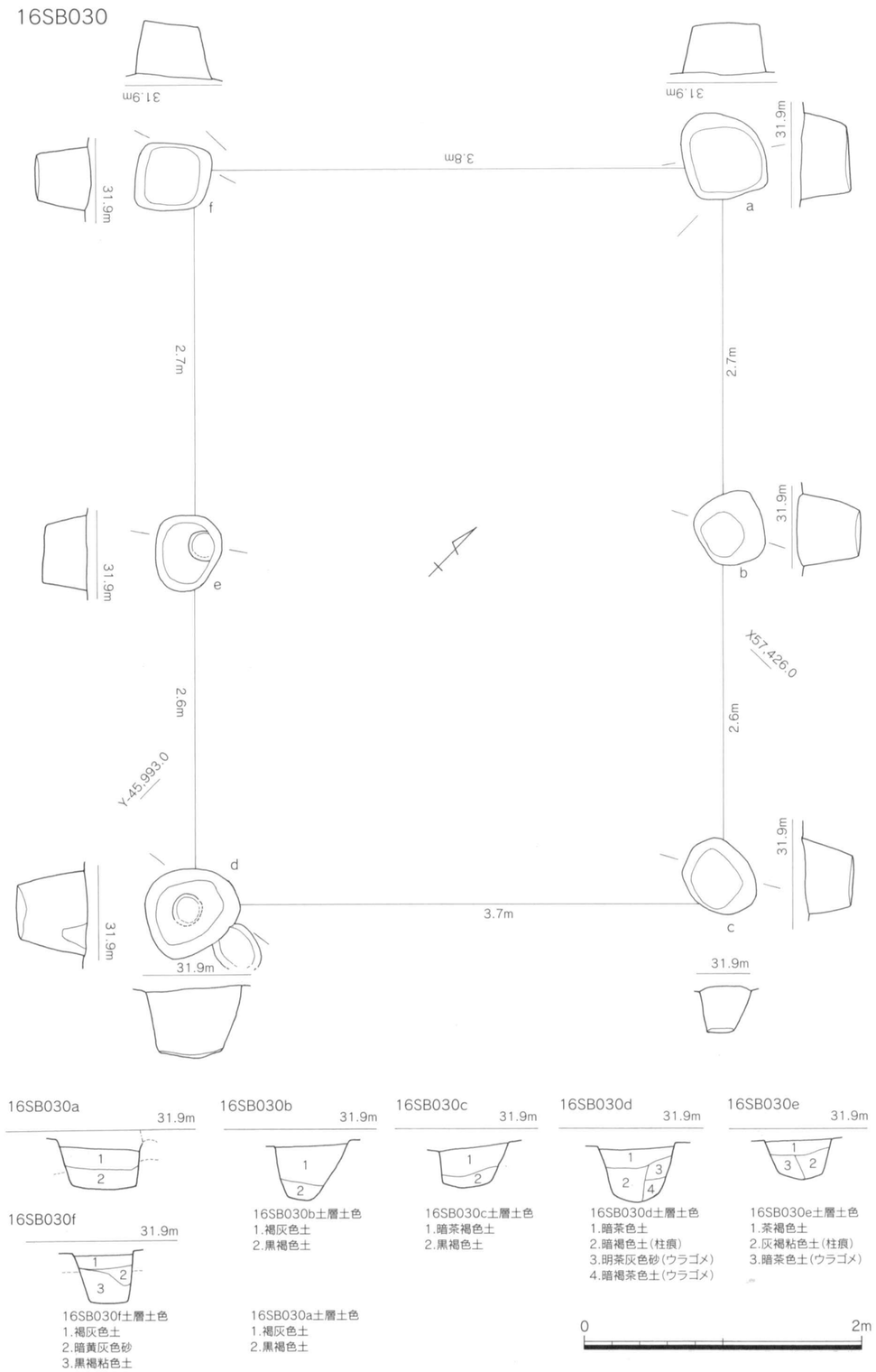


Fig.15　16SB030 実測図（1/40）

物を含まない。土層図の土色番号のNo.9～15が上層で遺物を大量に含む。出土遺物をみると弥生時代中期～後期の遺物が主体で、須恵器、土師器、瓦などの奈良時代の遺物も一定量含む傾向がある。なお、現場担当者のメモでは越州窯系青磁が出土していることから、最終埋没の時期は平安時代初頭まで下る可能性がある。

16SD002（Fig.13）

調査区南部を東西方向に延びる小溝。埋土は淡茶色砂。長さ9m、幅0.35m、深さ0.05～0.07mを測る。

16SD051（Fig.13）

調査区南部中央を東西方向にのびる溝。長さ8m、幅0.95～1.3m、深さ0.13mを測る。

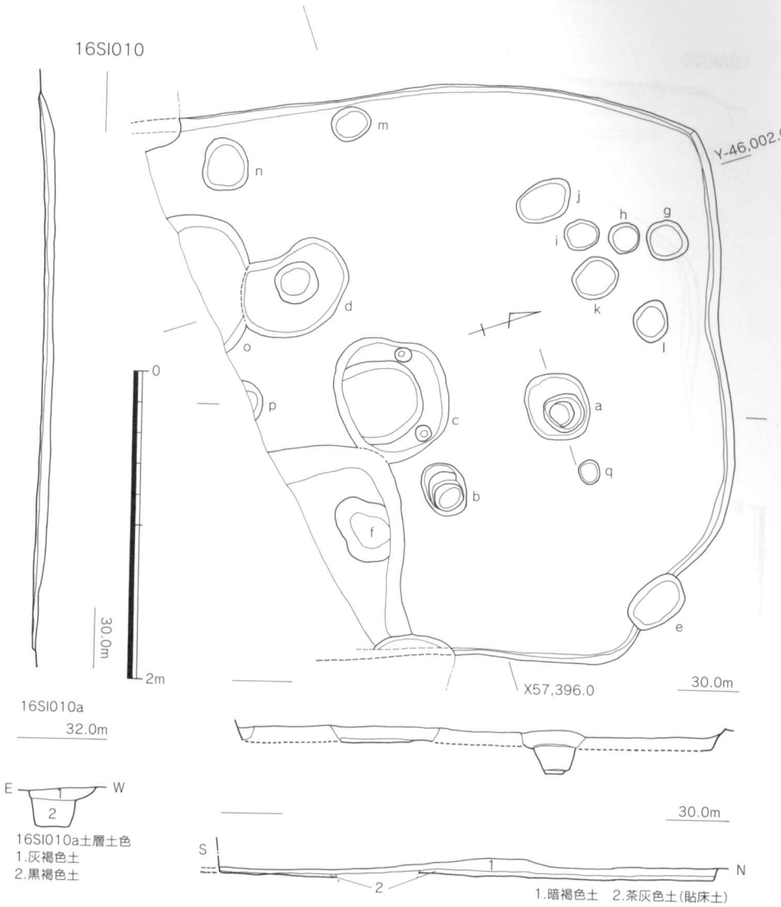


Fig.16　16SI010 実測図（1/40）

土坑

16SK008（Fig.13）

調査区南部東よりに位置する土坑。遺構の切り合い関係では16SI010より新しい。東西長1.8m、南北長2.1mで調査区外に展開する。出土遺物から埋没時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

その他の遺構

16SX011（Fig.12）

調査区南部中央に位置する小穴。東西長0.4m、南北長0.35m、深さ0.22mを測る。出土遺物から埋没年代は弥生時代中期中葉。

16SX015（Fig.13、CD写真92）

調査区中央西側に位置する小穴。東西長0.55m、南北長0.46m、深さ0.15mを測る。一部、床面から小穴状に0.06mほど下がる。城ノ越式の甕が二点割れた状態で出土している。底の部分を欠くため、当初から破片だった可能性が高い。出土状態からは底に据えられたものではなく、埋没過程の途中で埋まっているように考えられる。出土遺物から埋没年代は弥生時代中期初頭と思われる。

16SX033（Fig.12）

調査区南部西よりに位置する小穴。東西長0.45m、南北長0.5m、深さ0.21mを測る。出土遺物より埋

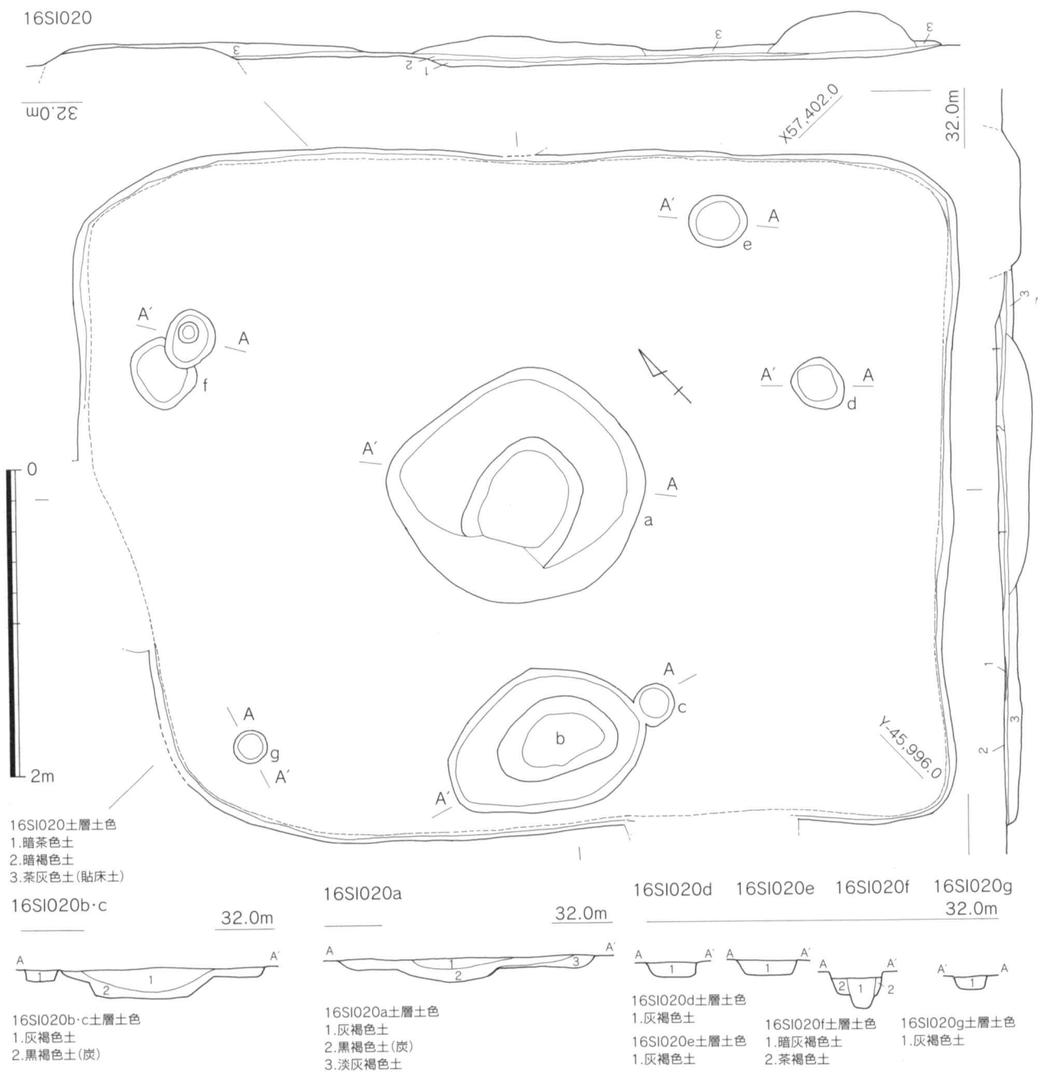


Fig.17　16SI020 実測図（1/40）

没年代は、弥生時代中期中葉。

16SX036（Fig.12）

調査区中央西端に位置する小穴。遺構の切り合いでは16SD001に切られる。出土遺物より、埋没時期は弥生時代中期。

16SX039（Fig.12）

調査区中央部西よりに位置する小穴群。出土遺物より埋没時期は弥生時代中期後半。

16SX042（Fig.12）

調査区南部中央に位置するたまり状遺構。遺構の切り合い関係で16SI020を切っている。東西長1m、南北長1.2mを測る。出土遺物の時期から埋没時期は弥生時代中期。

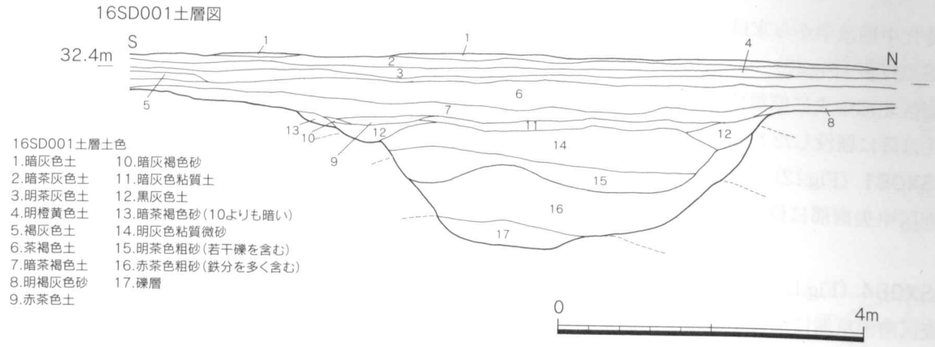


Fig.18　16SD001 土層図（1/40）

16SX043（Fig.12）

調査区南部西よりに位置するたまり状遺構。遺構の切り合い関係では16SD051を切る。出土遺物から埋没時期は弥生時代中期後葉である。

16SX044（Fig.12）

調査区南部中央に位置する小穴。遺構の切り合い関係では15SD051を切る。出土遺物から埋没年代は弥生時代後期となる。

16SX049（Fig.12）

調査区南部中央に位置する小穴群。S-48のたまり状遺構の床面に穿たれていた。出土遺物から埋没年代は弥生時代中期以降と推定される。

16SX053（Fig.12）

調査区北部西よりに位置する小穴群構。出土遺物から弥生時代中期以降の埋没と思われる。

16SX054（Fig.12）

調査区北部西よりに位置する小穴。直径0.3m、深さ0.15mを測る。出土遺物より弥生時代以降に埋没している。

16SX063（Fig.12）

調査区中央南西よりに位置するたまり状遺構。東西長0.85、南北長1m、深さ0.21mを測る。出土遺物から弥生時代中期中葉以降に埋没。

16SX064（Fig.12）

調査区南部東よりに位置する小穴。出土遺物から埋没年代は、古墳時代初頭。

16SX066（Fig.12）

調査区北部中央北端に位置する柱穴。本来は16SB030aとすべきだが、調査時の取り上げに従い、ここでも小穴としてとりあげる。出土遺物の年代より、埋没時期は弥生時代中期以降と考えられる。

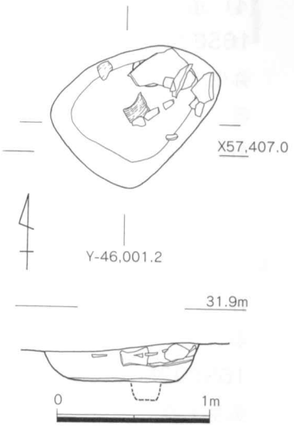


Fig.19　16SX015 実測図（1/40）

16SX068（Fig.12）

調査区北部東よりに位置する小穴。隣接して石戈が出土している。遺構の切り合い関係では16SD001に切られている。出土遺物から弥生時代中期以降に埋没している。

16SX069（Fig.12）

調査区北部東よりに位置する小穴。遺構の切り合い関係では16SD001に切られている。出土遺物から

弥生時代中期後半から末以降に埋没している。

16SX072（Fig.12）

調査区北部中央に位置する小穴。遺構の切り合い関係では16SB030dを切っている。出土遺物から奈良時代以降に埋没したと考えられる。

16SX081（Fig.12）

調査区中央南部に位置する小穴群。出土遺物から埋没時期は弥生時代後期以降に埋没したものである。

16SX084（Fig.12）

調査区南部東端に位置するたまり状遺構。出土遺物から埋没時期は弥生時代中期以降である。

16SX086（Fig.12）

調査区南部東よりに位置するたまり状遺構。東西長4.8m、南北長1.95m、深さ0.11mを測る。出土遺物から埋没時期は奈良時代以降である。

16SX092（Fig.12）

調査区南部中央に位置するたまり状遺構。遺構の切り合い関係では16SI020に切られている。出土遺物から埋没年代は、弥生時代中期以降である。

16SX094（Fig.12）

調査区南部中央端に位置するたまり状遺構。遺構の切り合い関係では16SI010に切られている。出土遺物から埋没時期は古墳時代初頭である。

16SX096（Fig.12）

調査区北部東よりに位置する小穴状遺構。遺構の切り合い関係では16SD001に切られている。出土遺物から埋没年代は弥生時代中期以降に埋没したものと考えられる。

（4）遺物

16SB025a出土遺物（Fig.20、CD写真116・117）

弥生土器

壺（1）　口縁がラッパ状に開く広口壺の小片と思われるもので、表面に赤色顔料が塗布される。

16SB025b出土遺物（Fig.20、CD写真116・117）

弥生土器

甕（2,3）　2は底がややレンズ状になる4ないし5タイプのもので、底径が4.9cmに復元される。後期中頃以降の所産になる。3は底が平たい底部分類の3タイプのもので、底径が7.0cmに復元される。

鉢（4）　口縁がやや内側に曲がる形状のもので、淡橙色を呈す。

器台（5）　口縁が直線的に開く形状のもので、白灰色を呈す。広口壺の可能性もある。

16SB025c出土遺物（Fig.20、CD写真116・117）

弥生土器

甕（6、7）　口縁がL字形に曲がり内側に若干突出する口縁形状4タイプのもので、淡橙色を呈す。

16SB025cウラゴメ出土遺物（Fig.20、CD写真116・117）

弥生土器

甕（8）　底が平たい3タイプのもので、赤褐色を呈す。底径が8.0cmに復元される。

高坏（9）　端部が下方に若干突出する形状をなすもので、裾部と考えられる。淡黄褐色を呈す。

16SB025d出土遺物（Fig.20、CD写真116・117）

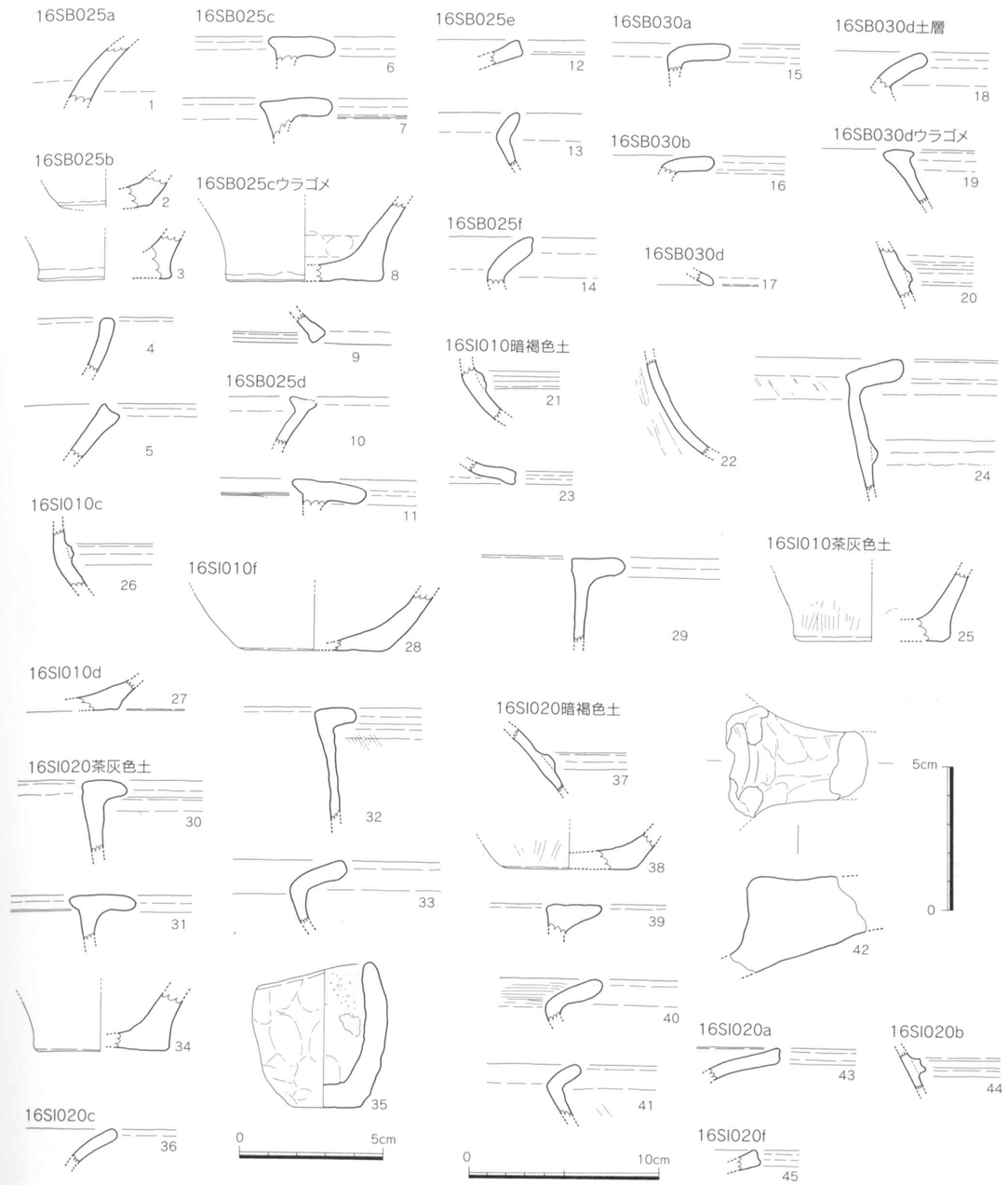


Fig.20　筑前国分尼寺跡第16次調査　掘立柱建物・住居出土遺物実測図（1/2、1/3）

弥生土器

壺（10）　広口の口縁端部が鋤先状になる壺1aタイプの口縁部片で、くすんだ橙色を呈す。

甕（11）　口縁がL字形に曲がり内側に若干突出する口縁形状4タイプのもので、くすんだ橙色を呈す。

16SB025e出土遺物（Fig.20、CD写真116・117）

弥生土器

壺（12,13）　12は広口の口縁端部で表面に赤色顔料が塗布される。13は口縁が短く屈曲する壺分類2cタイプのいわゆる短頸壺である。淡黄褐色を呈す。

16SB025f出土遺物（Fig.20、CD写真116・117）

弥生土器

甕（14）　口縁がく字形に開くものに復元したが、L字形に近いものと思われる。淡橙色を呈す。

16SB030a出土遺物（Fig.20、CD写真118・119）

弥生土器

甕（15）　口縁がL字形に曲がる口縁形状４タイプのもので、白褐色を呈す。

16SB030b出土遺物（Fig.20、CD写真118・119）

弥生土器

甕（16）　口縁がL字形に曲がる口縁形状４タイプのもので、くすんだ橙色を呈す。

16SB030d出土遺物（Fig.20、CD写真118・119）

弥生土器

蓋（17）　短頸壺の蓋になるものと思われる。くすんだ橙色を呈す。

16SB030d上層出土遺物（Fig.20、CD写真118・119）

弥生土器

甕（18）　口縁がく字形に開くもので、くすんだ灰色を呈す。

16SB030dウラゴメ出土遺物（Fig.20、CD写真118・119）

弥生土器

壺（19,20）　19は端部がやや厚く作られる素口縁に近い形状を持つ壺2dタイプになるものと考えられる。淡黄褐色を呈す。20はM字突帯をほどこした胴部の破片で赤色顔料を塗布する。

16SI010暗褐色土出土遺物（Fig.20、CD写真118・119）

弥生土器

壺（21,22）　M字突帯をほどこした頸部片で、赤色顔料を塗布する。胎土は淡橙色を呈す。

坏（23）　端部が垂下する形状を持つ裾部の破片と考えられ、橙色を呈す。

甕（24）　口縁が内側にも突出するL字形に曲がる口縁形状４タイプのもので、胴部上位に三角形の突帯を有す。中期中頃の須玖Ⅱ式に相当する。

16SI010茶灰色土（Fig.20、CD写真118・119）

甕（25）　底部の破片。胎土の色調は淡橙色を呈す。

16SI010c出土遺物（Fig.20、CD写真118・119）

弥生土器

壺（26）　M字突帯をほどこした頸部片で、赤色顔料を塗布する。胎土は白褐色を呈す。

16SI010d出土遺物（Fig.20、CD写真118・119）

弥生土器

壺×鉢（27）　横に体部が広がる形状を持つもので、壺ないし鉢の形状が考えられる。淡橙色を呈す。

16SI010f出土遺物（Fig.20、CD写真118・119）

弥生土器

壺（28）　球形の体部につながる形状を持つもので、底径は7.8cmに復元される。明橙色を呈す。

甕（29）　口縁がL字形に曲がる口縁形状４タイプのもので、明橙色を呈す。

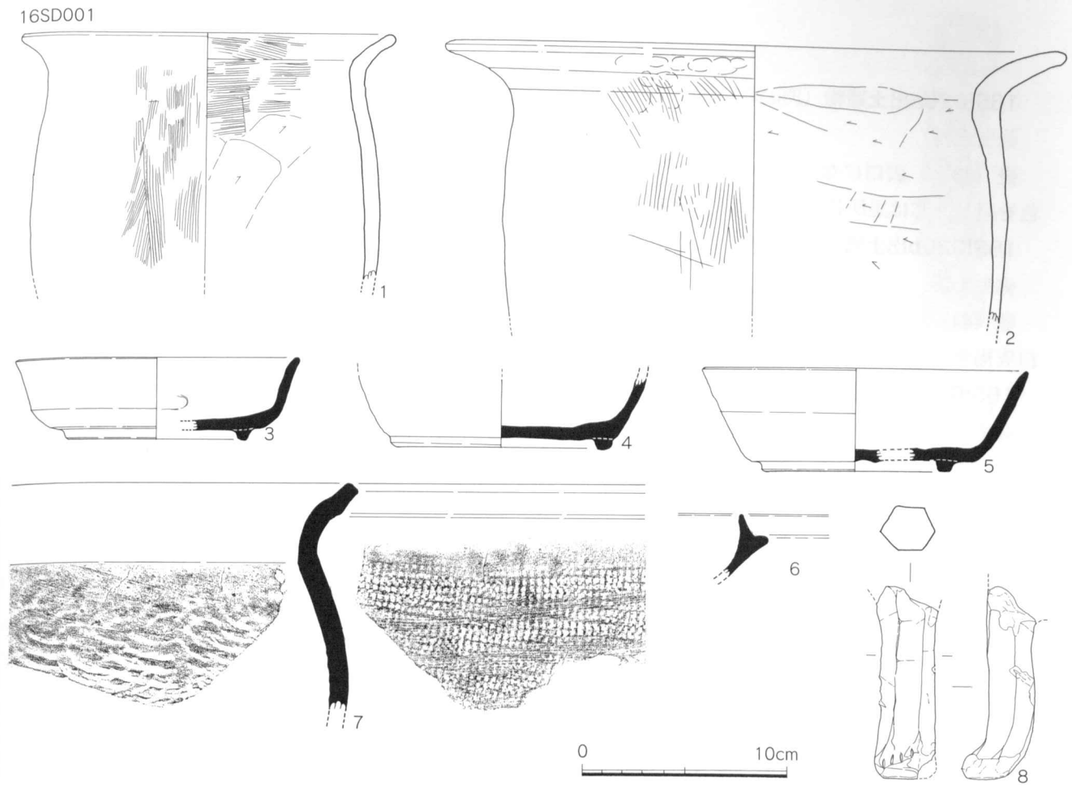


Fig.21　16SD001 出土遺物実測図（土器）その１（1/3）

16SI020茶灰色土出土遺物（Fig.20、CD写真120～122）

弥生土器

甕（30～34）　30～33は口縁がL字形に曲がる口縁形状４タイプのもので、32は内側の張り出しが明瞭で一つ古い口縁分類３のタイプに属し、33は、やや「く」字形の傾向が見られる新しい様相を持つものである。明橙色を呈す。

ミニチュア土器

坏（35）　手づくねにより深いカップ状に整形されたもので、内面には黒茶褐色のマンガン様のものが全体に付着し、その上の一部に赤褐色の顔料のようなものが付いている。口径4.3cm、高さ5.1cm、底径2.5cmを測る。

16SI020暗褐色土出土遺物（Fig.20、CD写真120・121）

弥生土器

壺（37,38）　37はM字突帯をほどこしたもので、白灰色を呈す。38は平底のもので、底径が9.0cmに復元される。

甕（39～41）　39は口縁がL字形に曲がる口縁形状４タイプのもので、40と41は「く」字形の傾向が見られる新しい様相を持つものである。明橙色～淡茶褐色を呈す。

土製品

匙形土製品（42）　カップ状の深いたまり部に幅2.3cmほどの把手が付く。手づくねで整形されたままである。黄白褐色を呈す。

16SI020a出土遺物（Fig.20、CD写真120・121）

弥生土器

壺（43）　広口になる壺1bタイプのものの口縁端部片で、赤褐色顔料が塗布される。表面は白灰褐色を呈し、芯は黒灰色を呈す。

16SI020b出土遺物（Fig.20、CD写真120・121）

弥生土器

壺（44）　身幅の0.8cmほどの狭いM字突帯をほどこしたもので、赤褐色顔料が塗布される。表面は白灰褐色を呈し、芯は黒灰色を呈す。

16SI020f出土遺物（Fig.20、CD写真120・121）

弥生土器

壺（45）　広口になる壺1bタイプのものの口縁端部片で、赤褐色顔料が塗布される。淡褐色を呈す。

16SD001出土遺物（Fig.21～24、Pla.4-1・2、CD写真93、123～144）

土師器

甕（1,2）　1は口径18.2cm、器高11.7cmを測る。口縁はゆるいS字形で、内面の胴部上位までハケが及ぶ。白黄褐色を呈す。古墳時代の所産。2は口径30.1cm、器高13.4cmを測り、白灰褐色を呈す。口縁は鋤先状に屈曲する奈良時代の所産のものである。

獣脚（8）　ヘラでそぎ落としたような棒状を呈し、接地部分が屈曲し、ヘラ先で連続した縦方向の刻みを入れている。香炉や鉢形土器の獣脚部分で、焼成は硬い淡橙色を呈す。

須恵器

坏c（3～5）　高台が四角いc3タイプのもので、3は硬質で白灰色を呈し、口径13.8cm、器高3.4cm、底径8.8cmに復元される。4は軟質で白灰色を呈し、器高3.4cm、底径10.8cmに復元される。5は硬質で灰色を呈し、口径15.8cm、器高5.1cm、底径9.2cmに復元される。

坏（6）　返りの付く坏身で九州須恵器編年のⅣ期、奈良文化財研究所分類の坏Hの形状を呈す。高さ3cmを測る。

甕（7）　頸部が広く開いた鉢のような形状を呈し、外面に格子目のタタキが、内面に青海波文の当て具痕が残る。焼成は軟質で白灰色を呈す。高さ11cmを測る。

瓦

軒丸瓦（9）　表面が黒色、芯が灰白色を呈す軟質な焼きのもので、外縁に連続鋸歯文のある老司Ⅱ式の軒丸瓦である。内面にハケによるナデが施される。国分瓦窯跡でもハケによるナデのある老司Ⅱ式の軒丸瓦が採取されているため注目される。

軒平瓦（10）　外縁に連続鋸歯文のある老司式の軒平瓦である。灰黒色から灰白色を呈す軟質な焼成のもので、側辺はヘラによるシャープなケズリが施され、顎の下はなでによる調整が見られる。

丸瓦（11～15）　白灰色から黒灰色を呈す軟質な焼の一群で、縦方向にややそろった形で縄目が押し当てられている。12、14は玉縁がロクロ整形されハケ目が横に走っている。内面の布目は目が細かい。11は幅16.8cmを測る。奈良時代の鴻臚館式の段階の所産である。

平瓦（16～19）　丸瓦同様に白灰色から黒灰色を呈す軟質な焼の一群で、タタキ目は瓦の中央部分に縦方向に縄目が押し当てられ、小口付近は縄目が及んでいない。内面には4cm幅の桶板の痕跡が残る。19は小さな正格子のタタキ目を持つ。16は長さ39.5cmを測る。奈良時代の鴻臚館式の段階の所産である。

鉱滓（20～24）　鉄錆を伴う鉱物質のもので、気泡の痕跡も見られる。

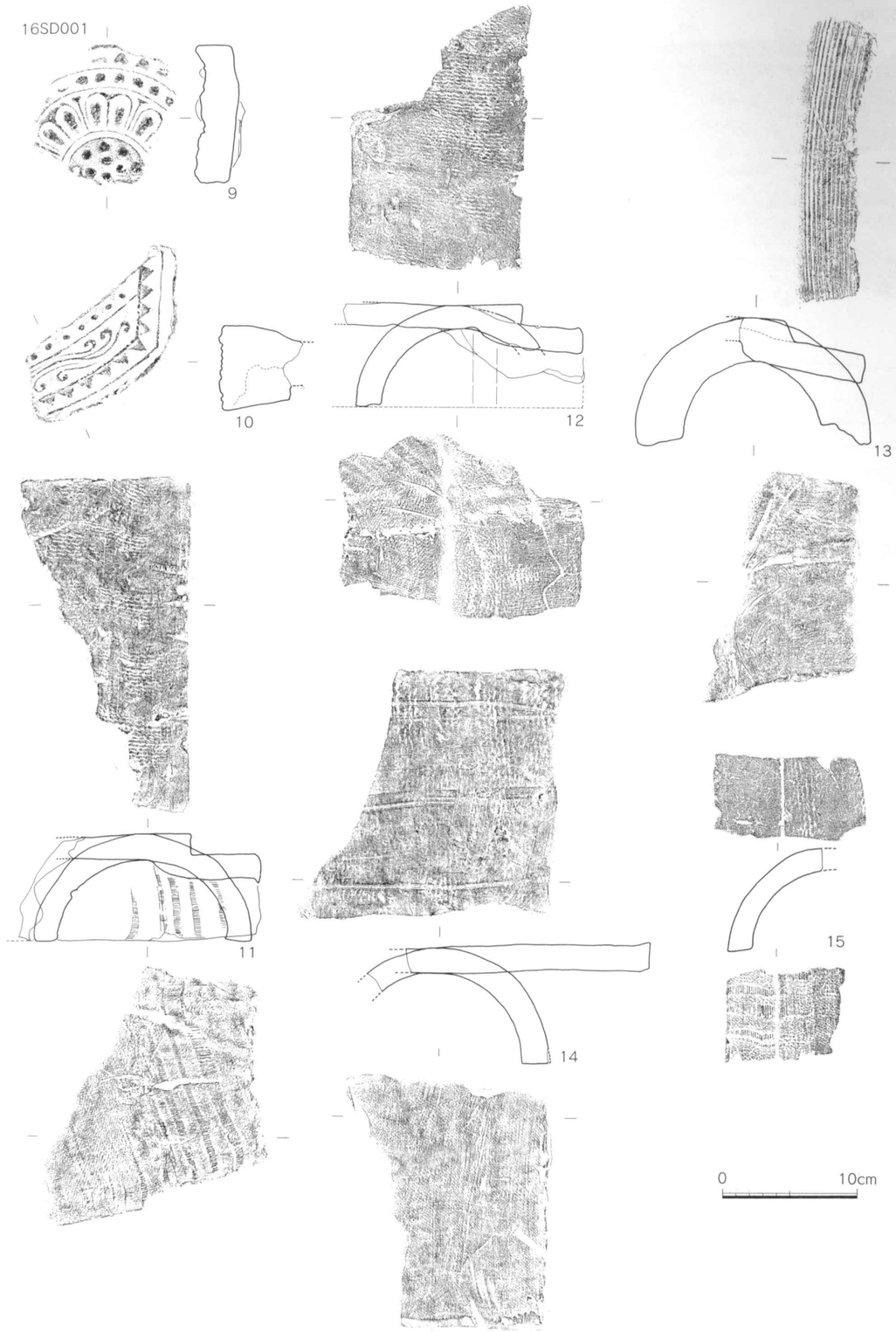


Fig.22　16SD001 出土遺物実測図（瓦）その2（1/4）

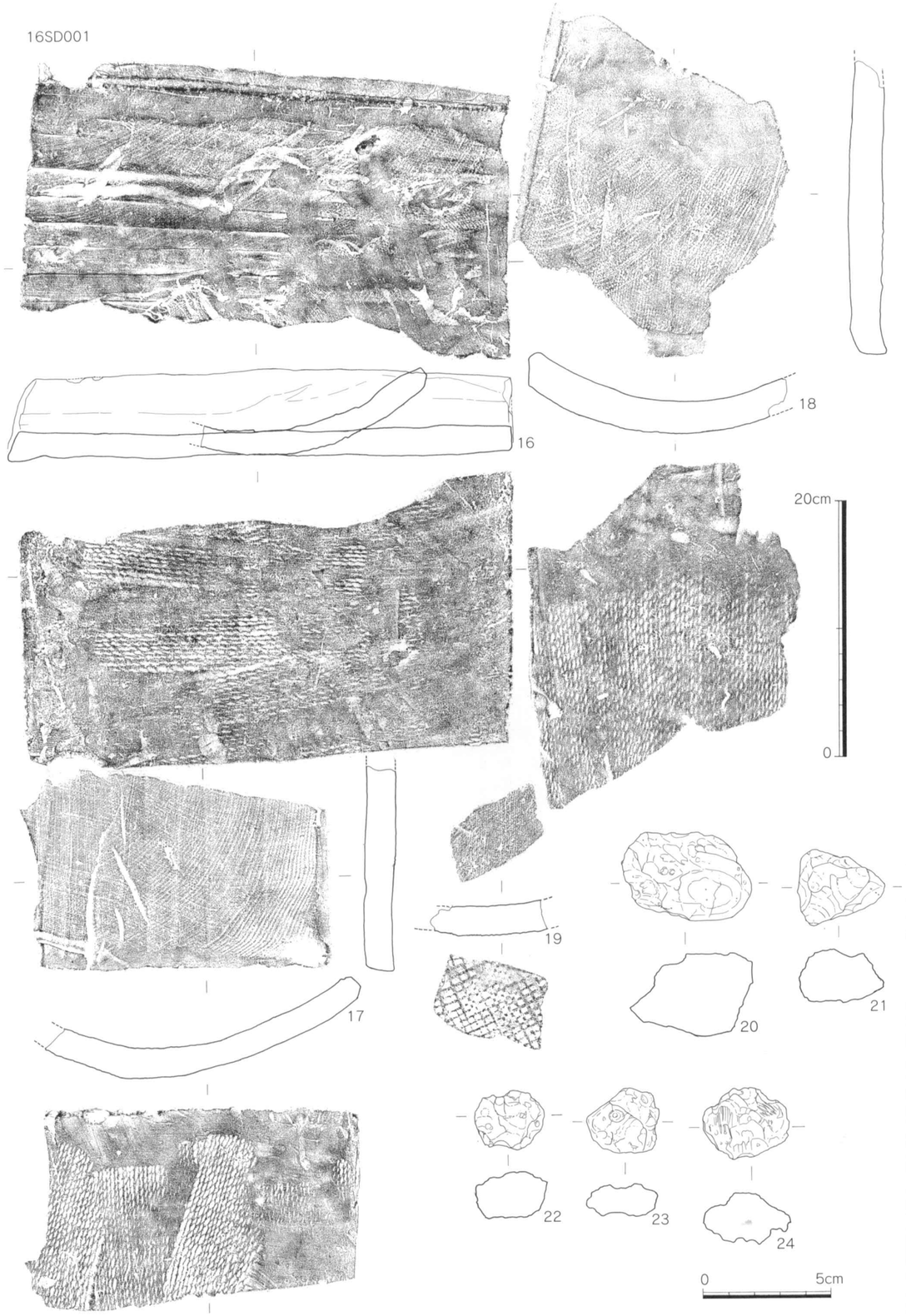


Fig.23　16SD001 出土遺物実測図（瓦、土製品）その 3（1/2、1/4）

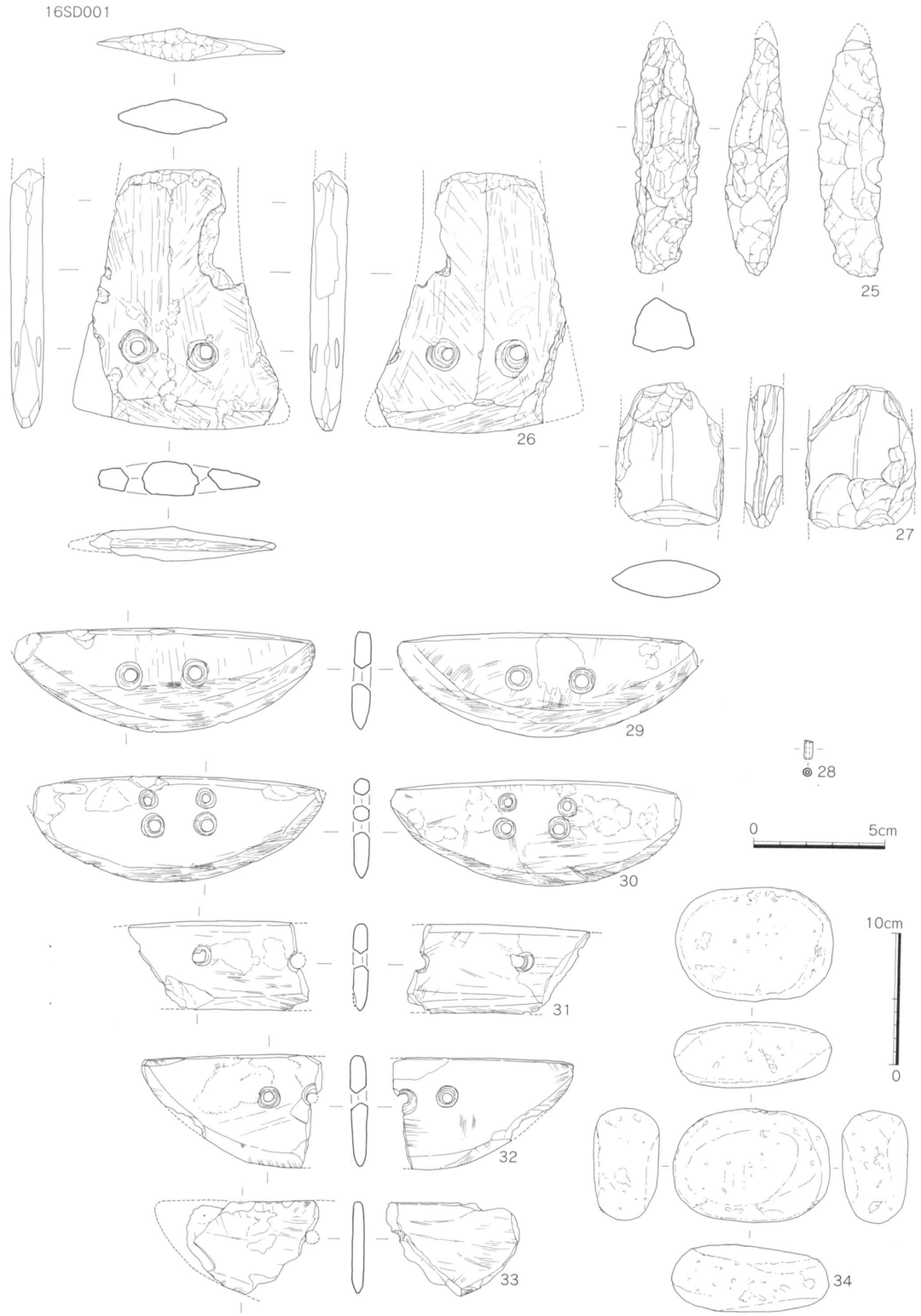


Fig.24　16SD001 出土遺物実測図（石製品）その 4（1/2、1/4）

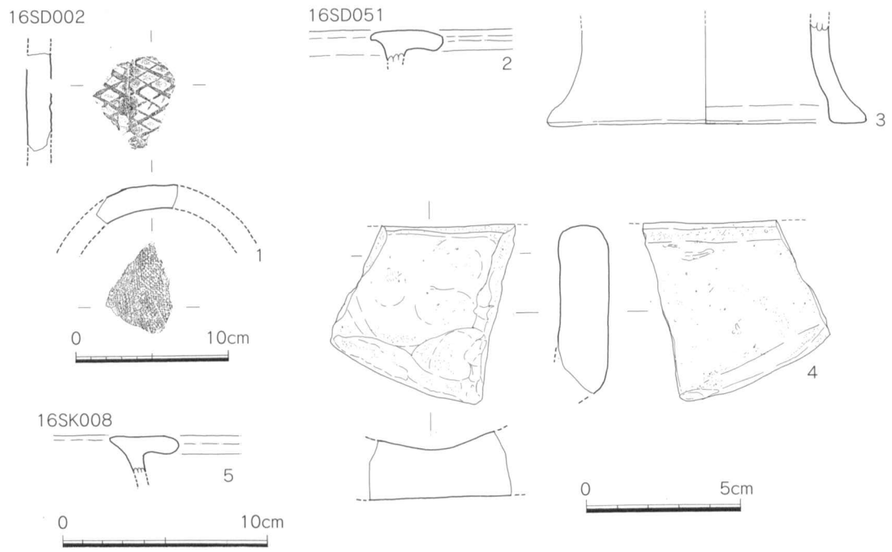


Fig.25　筑前国分尼寺跡第 16 次調査　溝出土遺物（1/2、1/3、1/4）

石器

三稜先尖器（25）　３面ともに加工を施し稜を形成するもので、先端が欠損する。安山岩製で風化が進行して白色化している。長さ9.1cm、幅2.3cm、厚さ2.3cmを測る。

石戈（26）　基部に茎を持たない新しい傾向のもので、先端は欠損後に二次的な打撃による加工が加えられている。蛇紋岩製で長さ9.9cm、幅5.8cm、厚さ1.3cmを測る。

石剣（27）　泥岩製で長さ5.5cm、幅4.1cm、厚さ1.4cmを測る。周縁は欠損後に二次的な打撃による加工が加えられている。もとの鎬はシャープなつくり出しでなく、断面形状も膨らんだ菱形となっており、後時的な様相を持つ。

管玉（28）　高さ0.7cm、幅0.3cmを測る。光沢のある緑色を呈す。

石包丁（29～33）　直線的な背部を持つタイプのもので、29と33は暗茶色の凝灰岩製の立岩系のもので、他は泥岩を用いている。紐穴の穿穴は1cm前後の径を持ち両面から施される。30は刃部が狭くなったためか背部に近い側に再度開けている。29は長さ11.5cm、幅3.9cm、厚さ0.7cm、30は長さ11.1cm、幅4.0cm、厚さ0.6cmを測る。

すり石×打具（34）　長丸形の手で握るほどの大きさの礫岩製で、長さ12.0cm、幅8.5cm、厚さ5.0cmを測る。周縁はあばた状に面が荒れており打具として使用されていたことが分かる。滑面化は顕著ではない。

16SD002出土遺物（Fig.25、CD写真145・146）

瓦

丸瓦（1）　１は格子目の中に縦方向の短い追刻線を入れたタタキを持つもので、焼成は硬質で灰色を呈し、厚さ1.5cmを測る。

16SD051出土遺物（Fig.25、CD写真145・146）

弥生土器

甕（2）　口縁がＬ字形に曲がり内側に若干突出する口縁形状４タイプのもので、茶褐色を呈す。

器台（3）　裾がラッパ状に開き、端部が撥形に厚みを増す形状を呈す。器高4.8cm以上、底径15.4cmに復元される。

石器

砥石（4）　小口を含む３面が利用されている砥石で、１面側が窪む形状を呈す。長さ5.9cm、幅6.0cm以上、厚さ1.6cmを測る。

16SK008出土遺物（Fig.25、CD写真145・146）

弥生土器

甕（5）　口縁がＬ字形に曲がり内側に若干突出する口縁形状４タイプのもので、茶褐色を呈す。

16SX011出土遺物（Fig.26、CD写真145・146）

弥生土器

甕（1,2）　１は口縁がＬ字形に曲がる口縁形状５タイプのもので、黒褐色を呈す。２は上方に開き気味の口縁形状４タイプのもので赤色顔料が施される。

16SX015出土遺物（Fig.26、CD写真147～151）

弥生土器

甕（3～6）　３は上げ底の城ノ越タイプの底部で灰橙色を呈す。底径7.2cmを測る。４も口縁が三角形の断面形状を成す中期初めの城ノ越タイプの口縁である。５と６は口縁が方形の断面形状を成す中期前半の須玖Ｉ式の古いタイプの口縁を持つ。５は口径28.0cm、６は28.2cmに復元され、橙色～茶褐色を呈す。

16SX033出土遺物（Fig.26、CD写真152・153）

弥生土器

甕（7）　口縁がＬ字形に曲がり内側に若干突出する口縁形状４タイプのもので、茶褐色を呈す。

高坏（8）　口縁が４タイプのもので、外側が下に下がる形状を呈す。淡橙色を呈す。

16SX036出土遺物（Fig.26、CD写真152・153）

弥生土器

甕（9・10）　口縁がＬ字形に曲がる口縁形状５タイプのもので、９は茶褐色、10は白褐色を呈す。

16SX039出土遺物（Fig.26、CD写真152・153）

弥生土器

壺（11）　中央がゆるく窪むM字突帯を持つ胴部の小片で赤色顔料を塗布する。

甕（12）　口縁がＬ字形に曲がり内側に若干突出する口縁形状４タイプのもので、灰褐色を呈す。

16SX042出土遺物（Fig.26、CD写真152・153）

弥生土器

甕（13,14）　口縁がＬ字形に曲がる口縁形状４タイプのもので、茶褐色を呈す。

16SX043出土遺物（Fig.26、CD写真152・153）

弥生土器

甕（15）　口縁がＬ字形に曲がる口縁形状４タイプのもので、明橙色を呈す。

16SX044出土遺物（Fig.26、CD写真152・153）

弥生土器

甕（16,17）　16は口縁がＬ字形に曲がる口縁形状４タイプのもので、淡橙色を呈す。17は底が平たい３タイプのもので、白褐色を呈す。

16SX049出土遺物（Fig.26、CD写真152・153）

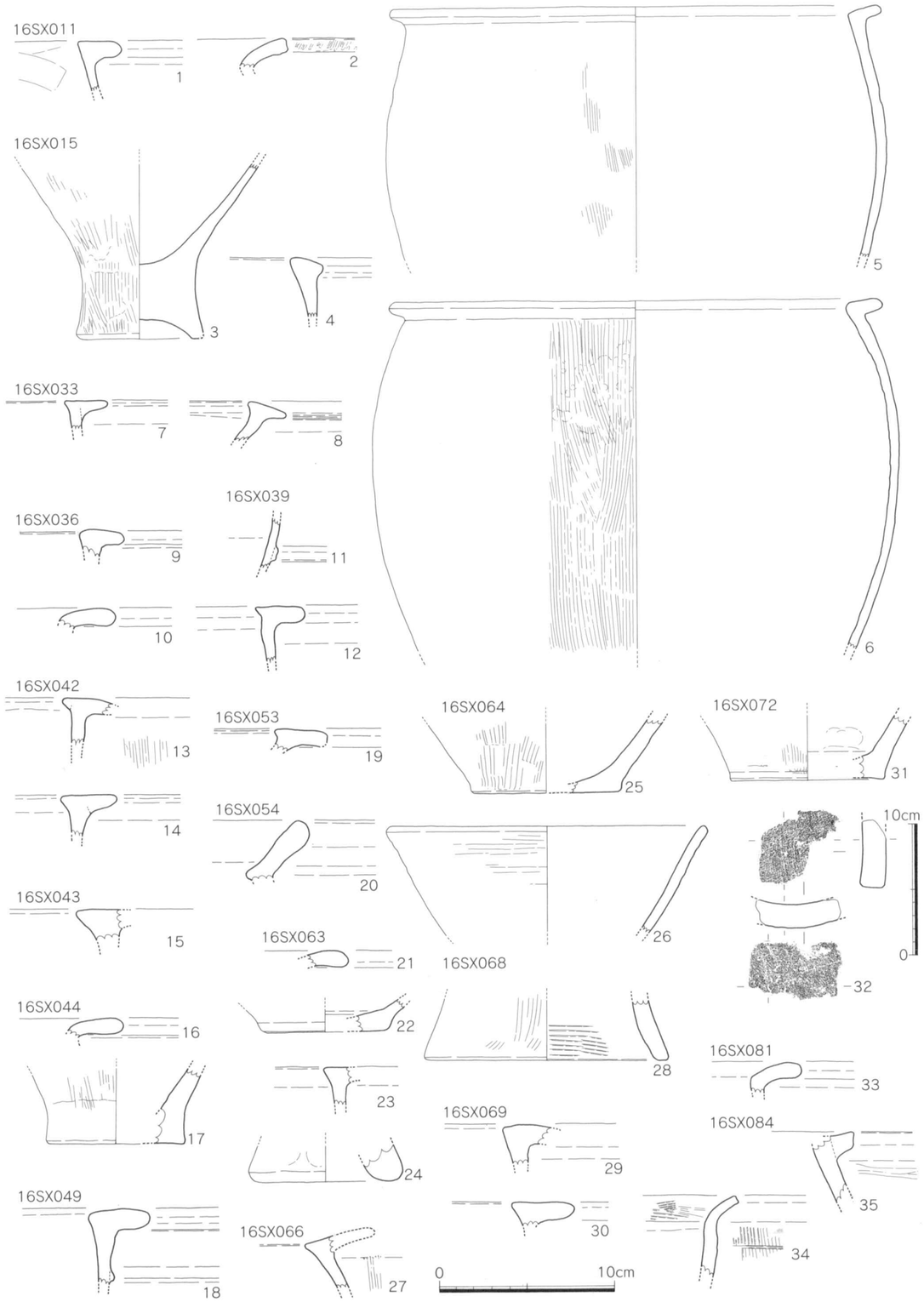


Fig.26　筑前国分尼寺跡第 16 次調査　その他の遺構出土遺物その 1（1/3、1/4）

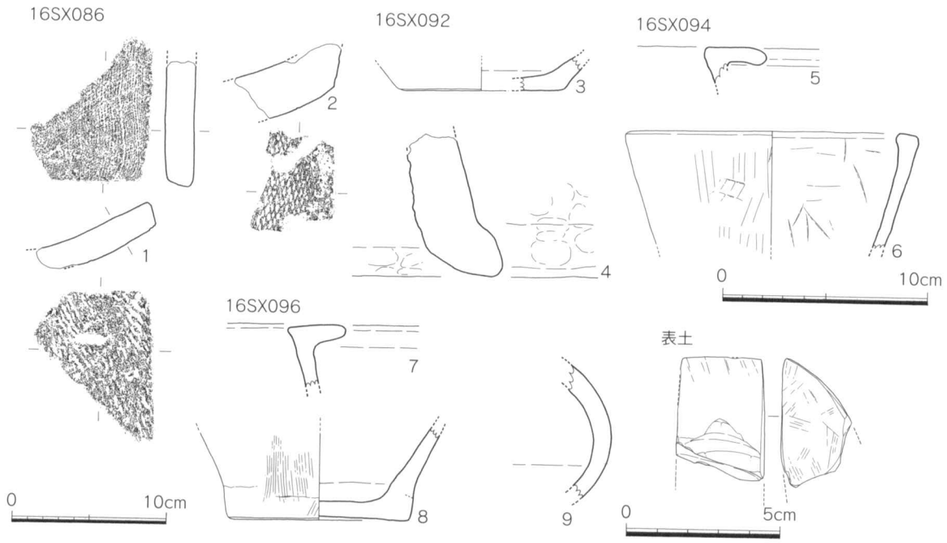


Fig.27 筑前国分尼寺跡第 16 次調査　その他の遺構出土遺物その 2（1/2、1/3、1/4）

弥生土器

甕（18）　口縁がＬ字形に曲がる４タイプのもので、胴の上部に断面形状が三角形の突帯を有す須玖Ⅰ式でも初期の形状を有す。淡褐色を呈す。

16SX053出土遺物（Fig.26、CD写真154・155）

弥生土器

高坏（19）　口縁がＬ字形に曲がる４タイプのもので、上面が平たい形状を呈す。淡褐色を呈す。

16SX054出土遺物（Fig.26、CD写真154・155）

弥生土器

甕（20）　口縁が内側に傾く形状のもので、口縁端部が丸く収められる須玖Ⅱ式のものである。くすんだ褐色を呈す。

16SX063出土遺物（Fig.26、CD写真154・155）

弥生土器

甕（21・23）　21は口縁が水平な４タイプのものと思われるもので、淡橙色を呈す。23は口縁がＬ字形に曲る４タイプのもの。

壺（22）　平たい底部から横に立ち上がる胴部を持つことから壺と判断される。淡褐色を呈す。

支脚（24）　ユビオサエによって整形された筒状の分厚い体部を持つ。淡橙色を呈す。

16SX064出土遺物（Fig.26、CD写真154・155）

弥生土器

甕（25）　底が平たい３タイプのもので、底径が8.6cmに復元される。橙褐色を呈す。

鉢（26）　口径18.4cmに復元されるラッパ状に開く体部を持つもので、外面の上位に水平方向のタタキの痕跡が見られる。後期後半以降の所産と考えられる。

16SX066出土遺物（Fig.26、CD写真154・155）

弥生土器

壺（27）　口縁が「く」字に開く2aタイプのものと思われるもので、淡橙色を呈す。

16SX068出土遺物（Fig.26、CD写真154・155）

弥生土器

器台（28）　直線的に開く裾部を持つもので、外面は縦方向に、内面は横方向にハケ目調整が施される。明橙色を呈す。

16SX069出土遺物（Fig.26、CD写真154・155）

弥生土器

甕（29,30）　口縁がＬ字形に曲がる口縁形状４タイプのもので、29は白褐色を呈す。17は橙褐色を呈す。

16SX072出土遺物（Fig.26、CD写真156・157）

弥生土器

甕（31）　底が平たい３タイプのもので、底径が8.8cmに復元される。橙褐色を呈す。

瓦

平瓦（32）　表面が黒色、芯が灰白色を呈す軟質な焼きのものである。厚さ2cm。

16SX081出土遺物（Fig.27、CD写真156・157）

弥生土器

甕（33）　口縁がＬ字形に曲がる口縁形状４タイプのもので、淡橙色を呈す。

16SX084出土遺物（Fig.26、CD写真156・157）

弥生土器

鉢（34）　ゆるくＳ字に開く口縁を持つもので、体部上位に横方向の沈線が施される。弥生末～古墳前期初頭のものである。黒灰色を呈し表面に煤が被る。

ひさご形土器（35）　上方が広口壺で下方が甕の組み合わせによる複合型の土器で、高い突帯があり、上位の胴部と考えられる。外面は横方向のミガキが施される。

16SX086出土遺物（Fig.27、CD写真156・157）

瓦

平瓦（1・2）　１は灰白色、２は黒灰色を呈す軟質な焼きのものである。縄目のタタキを施す。側面はヘラケズリで整形される。厚さ2cm。奈良時代鴻臚館式段階のもの。

16SX092出土遺物（Fig.27、CD写真158・159）

弥生土器

甕（3）　底が平たい３タイプのもので、底径が8.0cmに復元される。白橙色を呈す。

支脚（4）　裾部の破片で端部が短く外に屈曲する。ユビオサエの跡が明瞭に残される。くすんだ灰褐色を呈す。

16SX094出土遺物（Fig.27、CD写真158・159）

弥生土器

甕（5）　口縁がＬ字形に曲がり、上面が平たい口縁形状４タイプのもの。白褐色を呈す。

鉢（6）　直線的に開く体部を持ち、口縁端部が内に厚くなる形状となる。器台の可能性もある。口径14.2cmに復元される。

16SX096出土遺物（Fig.27、CD写真158・159）

弥生土器

壺（7）　玉ねぎ状の胴部の小片と思われ、外面に赤色顔料を塗布する。

甕（8,9）　８は口縁がＬ字形に曲がり、上面が平たい口縁形状４タイプのもの。淡橙色を呈す。底が平たい３タイプのもので、底径が8.3cmに復元され、淡橙色を呈す。

表土出土遺物（Fig.27、CD写真158・159）

石器

柱状片刃石斧（10）　珪質泥岩を素材とする方柱状の石斧の刃先部分。長さ４cm、幅３cm、厚さ2.2cmを測る。

（5）小結

本調査区は筑前国分尼寺の南東の隣地にあり、南門の前面に延びる参道の東際の位置にあたる。しかし、今回の調査では直接的に尼寺に関する遺構は検出されなかった。

遺構は弥生中期中頃以降埋没の掘立柱建物16SB030、竪穴式住居16SI010、中期後半以降埋没の掘立柱建物16SB025、竪穴式住居16SI020が主体となる。掘立柱建物は土器の小片しか出ておらず、細かな存続時期は明確でない。16SB030と16SB025は近似した方位を持っており、時期の近い遺構である可能性も考えられる。住居は方形プランのこの時期のものとしては小規模なものであり、集落の主体はさらに別のところにある可能性がある。前後する時期の遺構として中期初頭、城ノ越式期の小規模な土坑状遺構16SX015や弥生後期終末期の16SX064などがある。前者は国分の弥生集落の始原期に関わる遺構として注目される。後者は15次調査での調査所見と合わせて、当該期の生活域の拡大に伴う現象で捉えられる遺構なのかもしれない。

そして歴史時代に入ると、調査区の中央を大溝16SD001が８世紀後半以降に埋没している。この大溝の開削の時期は明確にはできなかったが、弥生時代にまで遡る可能性も残されている。この大溝は尼寺の南辺を東から西に流下するもので、西隣地の９次調査では9SD015として調査され、そこでの最終埋没の時期は平安時代とされている。本調査区では鴻臚館式期のものと思われる瓦の一群に老司式の軒瓦が組む組み合わせで検出されており、至近か上流域に瓦を供給する環境があったのかもしれない。

今回の調査で弥生中期の集落相の一端が明確になったことは、国分地域での当該期の居住域、墳墓、生産域の棲み分けに関する考察を進めやすくなったといえる。

Ⅴ．まとめ

筑前国分尼寺跡は、東に位置する筑前国分寺跡に比べて、伝承や史料など残っておらず、埋蔵文化財の調査成果が期待されてきた。その筑前国分尼寺の存続時期だが、今までの発掘調査の研究成果によると８世紀後半頃に成立し、９世紀中頃あるいは後半には廃絶していた可能性が高いとされている。今回報告する15・16次調査の調査地点（Fig.2）は、立地としては、『筑前国分尼寺跡３』で推定された伽藍配置の外側（北東、南東）に位置しているのだが、国分尼寺跡に関係する遺構が広がっているのかどうかという点で検討してみたい。

結論から言えば、第15・16次調査では明確なかたちでは奈良時代の遺構は存在していない。これは、推定伽藍外に位置しているのであれば当然であり、国分尼寺の寺域の理解にとって間接的な証左の１つになろう。奈良時代の遺物は多く検出しているが、周囲からの流れ込みと見られる。特に注目されるのは、16次調査の大溝16SD001である。これは、尼寺に繋がる通路を横断する形で東西に延びており、もともとは弥生時代中期以降に掘削されたものであった。尼寺への通路を造営する上で、障害となるこの大溝を８世紀後半段階に埋め立てたのではないだろうか。以後、寺域外の廃棄場所になり、不要になった瓦などを多く廃棄していた可能性を指摘しておきたい。

筑前国分尼寺ができる以前の土地利用として、国分の集落の変遷の一端が住居跡として検出されている。縄文時代晩期の土坑15SK032が初現的な遺構である。弥生時代中期初頭の城ノ越式土器が出土した16SX015に端を発して、中期中頃には15SB005、16SB030、16SI010などの掘立柱建物や竪穴住居が造られ、中期後半には、16SB025、16SI020が存在している。後期終末期の遺構である16SX064 や、古墳時代前期初頭の15SI010、012まで集落は継続していたと考えられる。

今後は、国分尼寺の伽藍復元の研究を進めて将来的には史跡指定を念頭におきながら、調査成果による国分地域の地域史の解明を目標に、調査成果の早期公開および活用に努めていきたい。

Tab.4　筑前国分尼寺第 16 次調査　遺構番号台帳

※「遺構面」で未記入のものは、1面目および遺構面不明のものを含む。

S−番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況(古→新)	遺構間切合(古→新)	遺構面	時　期	地区番号
1	16SD001	大溝			25f、36、37、52、67、68、69、71、96→1		奈良(若干縄片混入有)	G2〜I6
2	16SD002	小溝					平安	B5〜8
3		浅い土坑					弥生中期中頃〜	B8
4		小穴			8、9、10、41→5		弥生〜	B7
5		浅い土坑					弥生中期後半〜	B6
6		小穴					弥生中期中頃	B7
7		小穴					弥生	C7
8	16SK008	土坑					弥生中期後半	B5
9		小穴					弥生	B5
10	16SI010	竪穴住居跡		茶灰色土→暗褐色土	94→10→5		弥生中期後半〜	B6
11	16SX011	小穴					弥生中期中葉〜	C6
12		小穴					弥生中期後半	C6
13		たまり状遺構					弥生	B8
14		小穴					弥生中期後半〜	B7
15	16SX015	小穴	城ノ越式土器出土				弥生中期初頭	E6
16		小穴群					弥生中期〜	B5
17		たまり状遺構			19→18→17		弥生中期中頃〜	D7
18		たまり状遺構			19→18→17		弥生中期中頃〜	D7
19		たまり状遺構			19→18→17		弥生	D7
20	16SI020	方形竪穴住居		暗褐色土→暗茶色土→明茶色土	92→20→42		弥生中期後半〜	C4〜D6
21		たまり状遺構					奈良	D7
22		たまり状遺構					弥生	D7
23		小穴					弥生	D7
24		小穴					弥生	D7
25	16SB025	掘立柱建物					弥生中期後半〜	K5〜J6
26		小穴群					奈良	E7
27		たまり状遺構群					弥生	E7
28		小穴群					弥生中期〜	E6
29		小穴群					弥生	E5
30	16SB030	掘立柱建物			30d→72		弥生中期後半〜後期	K2〜K4
31		小穴					奈良	B4
32		小穴群					弥生	C6
33	16SX033	小穴					弥生中期中葉〜	E6
34		小穴群					奈良	F6
35		欠番						
36	16SX036	小穴					弥生中期	F6
37		小穴					弥生中期	F6
38		小穴					弥生中期	F6
39	16SX039	小穴群					弥生中期後半〜	F6
40		欠番						
41		小穴					弥生	A6
42	16SX042	たまり状遺構			20→42		弥生中期後半	C5
43	16SX043	たまり状遺構			20→51→43		弥生中期後半〜	D6
44	16SX044	小穴					弥生後期〜	D5
45		欠番						
46		小穴					弥生	D6
47		小穴			49→48→47		弥生中期〜	D4
48		たまり状遺構			49→48→47		弥生中期	D4
49	16SX049	小穴群			49→48→47		弥生中期	D4
50		欠番						
51	16SD051	溝			91→20→51→44		弥生中期末〜後期	D6
52		小穴群					弥生	J6
53	16SX053	小穴群					弥生	K6
54	16SX054	小穴					弥生	J6
55		欠番						
56		小穴					弥生	K5
57		小穴					弥生	K4
58		小穴					弥生	K4
59		小穴群					弥生	L4
60		欠番						
61		小穴					弥生	K4
62		小穴群					弥生	F5
63	16SX063	小穴					弥生中期中葉〜	F5
64	16SX063	小穴					古墳初頭	E4
65		欠番						
66	16SX066	柱穴	16SB030の柱穴aと同一				弥生中期〜	L4
67		小穴					弥生	J5
68	16SX068	小穴					弥生中期	J3
69	16SX069	小穴					弥生中期後半〜末	J3
70		欠番						
71		小穴群					弥生	I3
72	16SX072	小穴					奈良	J3
73		小穴					弥生	K3
74		小穴					弥生	
75		欠番						
76		小穴					弥生	K2
77		小穴					弥生	K2
78		小穴					弥生	J2
79		小穴群					弥生	L3
80		欠番						
81	16SX081	小穴群					弥生後期	E4
82		小穴群					弥生	E4
83		小穴群					奈良	D3
84	16SX084	小穴					弥生中期〜	D2
85		欠番						
86	16SX086	たまり状遺構					奈良	D2
87		小穴群					弥生	E2
88		小穴					奈良	F2
89		小穴					弥生	D3
90		欠番						
91		小穴	S-20より古い		91→20→51→44		弥生	D5
92	16SX092	小穴					弥生中期〜	D6
93		小穴					弥生	C4
94	16SX094	小穴					古墳初頭〜	A7
95		欠番						
96	16SX096	小穴					弥生中期	I3

Tab.5　筑前国分尼寺跡第 16 次調査　出土遺物一覧表　(1)

S-1

須恵器	蓋1　蓋3　坏a2　坏c3　大甕　壺a　壺b
土師器	坏c3　甕a　獣脚　移動式カマド
弥生土器	中期:高坏　甕(丹塗)　甕棺(須玖式)　甕口5　甕底1
	甕底2　器台　筒形器台(丹塗)
	後期:甕底3×4
瓦類	平瓦(瓦質、縄目I)　平瓦(瓦質、無文)
	平瓦(瓦質、正格子)　丸瓦(瓦質、縄目I)
	軒平瓦(瓦質、老司式)　軒丸瓦(瓦質、老司式)
石製品	管玉(1)　石包丁(5)　三綾先尖器(1)　ob-f　and-f
	すり石(1)　石剣(1)　石戈(1)
金属製品	鉱滓

S-2

須恵器	甕
弥生土器	中期:甕口5　甕底3a
瓦類	平瓦(須恵質、格子目D群)

S-3

弥生土器	中期:甕底3

S-4

弥生土器	破片

S-5

弥生土器	中期:甕口5　蓋2

S-6

弥生土器	中期:甕口4

S-7

弥生土器	破片

S-8

弥生土器	中期:甕口4

S-9

弥生土器	破片

S-10a

弥生土器	中期:甕　壺(丹塗)

S-10b

弥生土器	中期:壺(丹塗)　甕

S-10c

弥生土器	中期:壺1×2　甕

S-10d

弥生土器	中期:壺
石製品	ob-f(1)　and-f(1)

S-10e

弥生土器	破片

S-10f

弥生土器	中期:甕口5　壺底3

S-10g

弥生土器	中期:壺(丹塗)　甕?

S-10h

弥生土器	中期:壺?

S-10k

弥生土器	破片

S-10 茶灰色土

弥生土器	中期:甕底3a
弥生土器	and-f(1)

S-10 暗褐色土

弥生土器	中期:甕口4　甕口5　壺底(3)　壺1b　壺4(丹塗)
石製品	ob-f(1)　ob-core　and-f

S-11

弥生土器	中期:甕口縁5　高坏

S-13

弥生土器	破片

S-14

弥生土器	甕口5

S-15

弥生土器	甕(城ノ越式)

S-16

弥生土器	中期:甕底3
石製品	ob-f

S-17

弥生土器	甕底3　甕口4

S-18

弥生土器	中期:甕底3

S-19

弥生土器	壺?(丹塗)

S-20

弥生土器	中期:甕口5×6　蓋2

S-20a

弥生土器	中期:壺1a　壺1b(丹塗)　甕(黒色付着物)
石製品	ob-f

S-20b

弥生土器	中期:甕2a×壺4

S-20c

弥生土器	中期:壺1b?

S-20d

弥生土器	後期:甕　壺口c2×3　壺×鉢

S-20e

弥生土器	破片

S-20f

弥生土器	中期:壺1b

S-20g

弥生土器	甕?

S-20j

弥生土器	中期:壺×甕×高坏(丹塗)

S-20 暗褐色土

弥生土器	中期:壺底3a　甕口4　甕口5　壺4

S-20 茶灰色土(S-10の誤りか)

弥生土器	中期:甕口4　甕口5　甕口6　甕2a?　甕底3　壺1a
石製品	ob-f　ob-core
土製品	ミニチュア土器杯

S-20 暗茶色土

弥生土器	中期:甕口4　壺4(丹塗)
土製品	匙形土製品(1)

Tab.6　筑前国分尼寺跡第 16 次調査　出土遺物一覧表　(2)

S-20 明茶色土

弥生土器	中期:甕口5×6　甕口5　壺

S-21

弥生土器	破片
瓦類	平瓦(瓦質)

S-22

弥生土器	破片

S-23

弥生土器	破片

S-24

弥生土器	甕?　壺?

S-25a

弥生土器	中期:壺1

S-25b

弥生土器	中期:甕底　壺底3×4　壺1b　鉢d　器台

S-25b ウラゴメ

弥生土器	中期:壺1b?

S-25b 柱痕

弥生土器	破片

S-25c

弥生土器	甕口3　甕口4　甕2a

S-25c ウラゴメ

弥生土器	中期:甕底3　壺1b　壺(丹塗)　高杯

S-25c 柱痕

弥生土器	破片

S-25d

弥生土器	中期:壺1a　甕　器台?
石製品	and-f

S-25d 柱痕

弥生土器	中期:甕口4

S-25d ウラゴメ

弥生土器	破片

S-25d 上層

弥生土器	中期:器台

S-25e

弥生土器	壺1b(丹塗)　壺2c

S-25f

弥生土器	中期:甕口6?

S-26

弥生土器	破片
瓦類	平瓦(縄目1)

S-27

弥生土器	破片

S-28

弥生土器	甕底部3a

S-29

弥生土器	破片

S-30a

弥生土器	中期:甕口5　甕2a　壺1b?(丹塗)

S-30b

弥生土器	中期:甕口5×6　支脚?

S-30c

弥生土器	中期:甕?　支脚　甕2a×壺4　支脚?

S-30d

弥生土器	中期:蓋2

S-30d 上層

弥生土器	弥生後期:甕口縁

S-30d ウラゴメ

弥生土器	中期:壺1×3(丹塗)　壺

S-30e

弥生土器	中期:甕2a?(丹塗)

S-30e 上層

弥生土器	中期:壺1a(小型品)

S-30f

弥生土器	壺×甕　甕3a

S-31

瓦類	平瓦(瓦質・縄目1、瓦質・無文)

S-32

弥生土器	破片

S-33

弥生土器	中期:甕口縁5　高杯
石製品	ob-f

S-34

弥生土器	中期:鉢c　壺1×甕2
瓦類	平瓦(瓦質・縄目)

S-36

弥生土器	中期:甕口縁5

S-37

弥生土器	破片
石製品	and-f

S-38

弥生土器	甕口

S-39

弥生土器	中期:甕口縁4×5　甕×壺(丹塗)　壺

S-41

弥生土器	破片

S-42

弥生土器	中期:甕口縁4　甕口縁5

S-43

弥生土器	中期:甕口縁5　器台

S-44

弥生土器	甕底部2
	中期:甕2b
	後期:甕口6

S-46

弥生土器	破片
石製品	ob-f

Tab.7　筑前国分尼寺跡第 16 次調査　出土遺物一覧表　(3)

S-47

弥生土器	甕底部3×4　壺×甕(体部突帯)

S-48

弥生土器	破片

S-49

弥生土器	中期:甕2a

S-51

弥生土器	中期:壺1a　甕口縁6　口縁4　器台
石製品	砥石　ob-f

S-52

弥生土器	破片

S-53

弥生土器	中期:甕口5　高杯

S-54

弥生土器	壺?　甕

S-56

弥生土器	破片

S-57

弥生土器	破片

S-58

弥生土器	破片

S-59

弥生土器	破片

S-61

弥生土器	破片

S-62

弥生土器	破片

S-63

弥生土器	中期:甕口縁5　甕底部3×4　壺1b
	支脚

S-64

弥生土器	甕底部3a
	弥生末～古墳前期初頭:鉢2

S-66

弥生土器	中期:壺2a

S-67

弥生土器	破片

S-68

弥生土器	中期:器台

S-69

弥生土器	中期:甕口縁5　甕口縁5×6

S-71

弥生土器	破片

S-72

弥生土器	壺底部　甕
瓦類	平瓦(瓦質・縄目1)
石製品	ob-f

S-73

弥生土器	破片

S-74

弥生土器	破片

S-76

弥生土器	破片

S-77

弥生土器	破片

S-78

弥生土器	破片

S-79

弥生土器	破片

S-81

弥生土器	甕口6

S-82

弥生土器	破片

S-83

弥生土器	破片
瓦類	平瓦(瓦質・縄目1)

S-84

弥生土器	中期:鉢c　壺5(?)

S-86

須恵器	甕1
弥生土器	甕底部3a　甕底部3b　壺A3a
瓦類	平瓦(瓦質・縄目1)
石製品	ob-f

S-87

弥生土器	破片

S-88

瓦類	平瓦(瓦質・縄目1)

S-89

弥生土器	破片

S-91

瓦類	破片

S-92

弥生土器	中期:甕底部3a　支脚

S-93

弥生土器	破片

S-94

弥生土器	甕口6　鉢　破片(丹塗)
	弥生末～古墳初:高坏1c
土製品	土鈴(丹塗)

S-96

弥生土器	中期:甕口縁5　甕底部3a

S-109(不明。この遺構は確認できず)

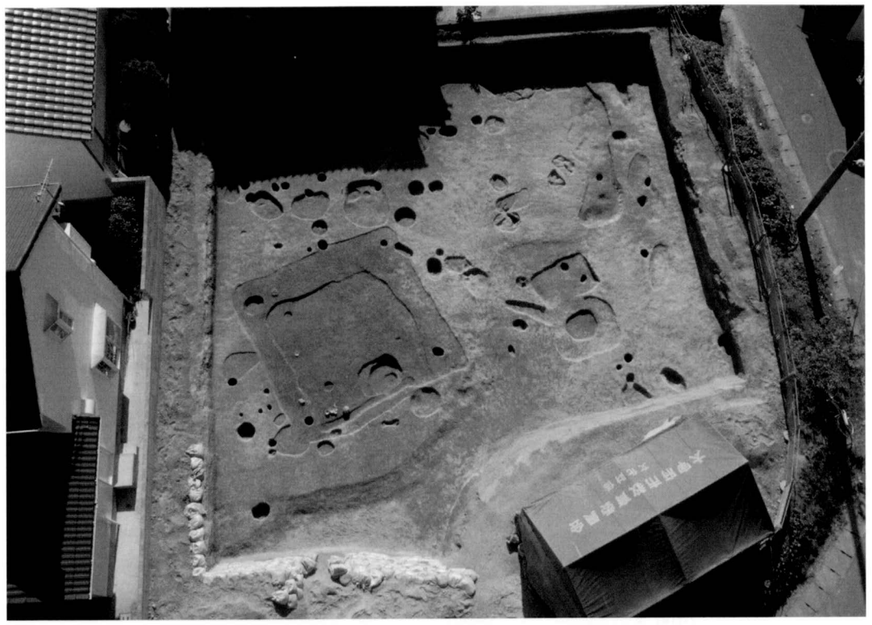
石製品	ob-f

表土

須恵器	蓋3　坏　甕　壺e
弥生土器	中期:高坏b(丹塗)　甕口5
	後期:甕口c2
瓦類	平瓦(瓦質、縄目I)
石製品	柱状片刃石斧(1)　ob-f

写真図版

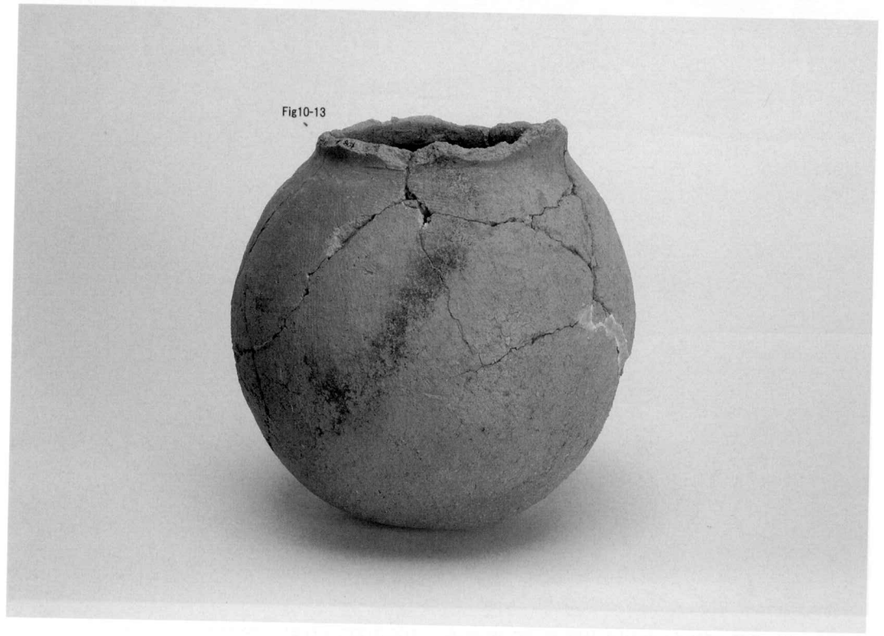
写真図版には、遺構全景と遺物の一部を掲載している。
その他の遺構写真および遺物写真は、附録のCDに収録している。
遺物写真に記載している番号は、Fig番号-Fig内の通し番号となっている。



Pla.1-1　筑前国分尼寺跡第 15 次調査　全景　空中写真（上が南）

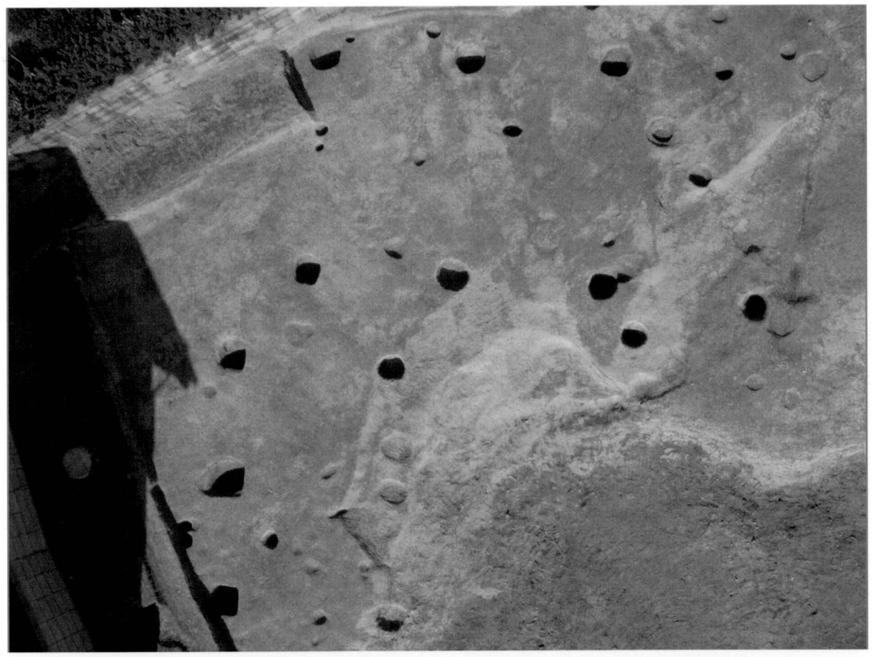
Pla.1-2 筑前国分尼寺跡第 15 次調査　SI010 完掘状況（上が南）

Pla.2-1　筑前国分尼寺跡第 15 次調査　15SI010 ⑧出土遺物



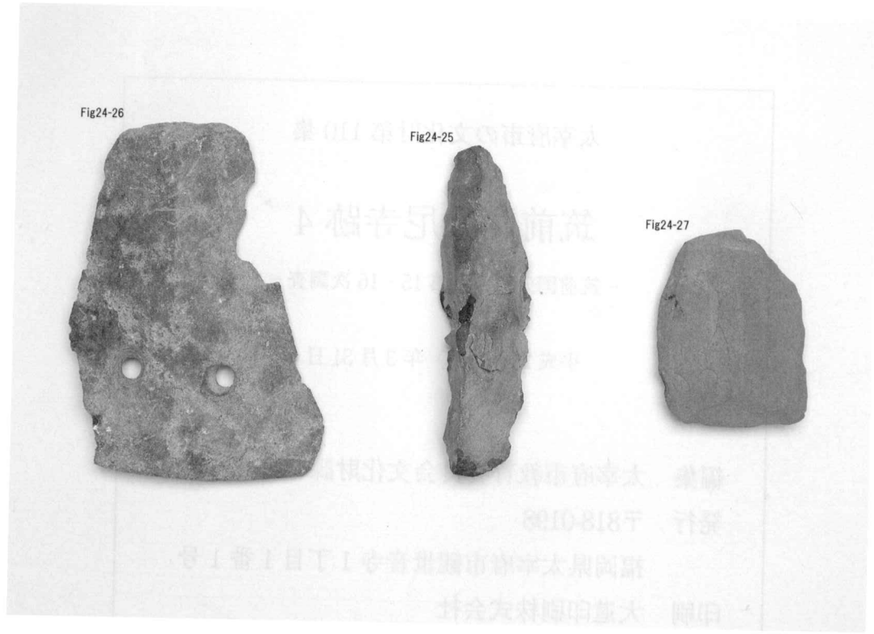
Pla.2-2　筑前国分尼寺跡第 15 次調査　15SI010 ④出土遺物

Pla.3-1　筑前国分尼寺跡第 16 次調査　全景　空中写真（上が北）



Pla.3-2　筑前国分尼寺跡第 16 次調査　16SB025・030　空中写真（上が北）

Pla.4-1　筑前国分尼寺跡第 16 次調査　SD001 出土遺物（瓦）



Pla.4-2　筑前国分尼寺跡第 16 次調査　16SD001 出土遺物（石製品）

報告書抄録

ふりがな	ちくぜんこくぶんにじあと
書名	筑前国分尼寺跡4
副書名	筑前国分尼寺跡第15・16次調査
シリーズ名	太宰府市の文化財
シリーズ番号	110集
編著者	髙橋学、山村信榮
編集機関	太宰府市教育委員会
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号
発行年月日	2010（平成22）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	条坊 【鏡山推定案】	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
ちくぜんこくぶんにじあと 筑前国分尼寺跡　第15次	条坊外	太宰府市 大字国分	402214	210049-015	57529.12	-45954.46	19911108	19911126	300	個人住宅
ちくぜんこくぶんにじあと 筑前国分尼寺跡　第16次	条坊外	太宰府市 大字国分	402214	210049-016	57412.13	-45989.02	19920921	19930331	520	個人住宅

所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構	主要遺物	特記事項
筑前国分尼寺跡 第15次	集落	弥生・古墳	竪穴住居 掘立柱建物	弥生土器中期～後期 古代土師器	
筑前国分尼寺跡 第16次	集落	弥生・古墳 古代	竪穴住居　掘立柱建物 〃　大溝	弥生土器甕　古式土師器 土師器　須恵器　瓦	石戈　石包丁　管玉

太宰府市の文化財第110集

筑前国分尼寺跡4

－筑前国分尼寺跡第15・16次調査－

平成22（2010）年3月31日

編集　太宰府市教育委員会文化財課
発行　〒818-0198
福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号
印刷　大道印刷株式会社
〒816-0873　春日市日の出町6丁目23番地